大正元年十月十日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年一月一日發行 第二卷第四號

大正二年十二月三十日印刷納本

近代思想

一月號

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二



御年玉用蓄音器

廿二號金二十二圓、十七號金十七圓

ニッケル喇叭附改良の蓄音器にして本社工塲に於て苦心研究の結果最低廉價販賣を試みる事を得たるなり、器械堅牢音聲美妙眞に格好の御進物用なり

新音譜賣出し

定價
- 赤紙印　二圓
- 青同　一圓五十錢
- 黒同　一圓五十錢

- 赤紙印 一七九四 一七九五 忠臣藏三段目、逆櫓（義太夫）源太夫
- 赤紙印 一八七八 一八七九 佐倉宗五郎子別れ（上下）（浪花節）吉田小奈良
- 黒紙印 二四一八 二四一九 曾我兄弟（同）中川伊勢吉
- 赤紙印 四六 四七 螢坂、朝顔日記（同）京山小圓
- 赤紙印 五二（同）同 五三 兒島高德（上下）
- 青紙印 二三三七 二三三八 野崎村（上下）（義太夫）竹本昇太夫
- 黒紙印 二三五二 二三五三 あほだら經出鱈目鳥盡し（あほだら經）梅坊主
- 黒紙印 三三八二 三三八三 戸山學校 Valse he C nrt de Luxemborg Two Step-Hiawasha
- 青紙印 二四〇八 二四〇九 三曲萬歳 荒川芳春 玉子屋千代鶴 ヤンレ節 播州皿屋敷 同千代鶴、トン八

神奈川縣川崎町
日本蓄音器商會
電話川崎四九番

再版

イブセン ノラ

森林太郎先生譯

■近代劇協會興行臺本

和田英作先生畫

定價一圓卅錢
郵税八錢

警醒社

故山本
飼山君

遺稿出版豫告

故飼山山本一藏君の知己友人等が集まりまして、其の遺稿を出版したいと思ひます。で、既に故人の先輩や、母校早稻田大學の諸教授の賛助をも得て、クロポトキン氏の『相互扶助論』や"Memoirs of n Revolutiohist"の飜譯の未定稿を始め、世に公けにしなかつた文章、日記、書簡等の編纂に着手して居ります。

故人の生前相識の間柄であつた人々は固より、故人の才を惜み、その夭折を惜む人々の賛成を得れば幸てす。猶ほ詳細は、芝區琴平町二番地熊ヶ谷方、深澤石十宛に御照會を乞ふ。

大正二年十二月

飼山會世話人

早稻田大學教授 勝俣銓吉郎閲 河竹繁俊譯

新刊 カンディダ

洋裝全一冊 正價金六拾錢 郵税金四錢

シヨー傑作集（第三）

本作は空想的なるノラを脱化せる**實際的**の**新しき女**カンディダを以て中心と爲し、之に配するに習俗的なる牧師の覺醒と不羈奔放なる年少詩人の戀愛とを以てせる悲喜劇なり。人の自覺に關して生じ、或は**夫婦相互**の**理解**なきより生ずる**近代的苦悶**の、巧に描寫せられて人情の機微を穿ち、思はず同感の涙を濺がしむるものあり譯筆の凡ならざる多言を要せず。劇文學、近代思潮、婦人問題の研究者、社會改良家、宗教家等の常に三讀すべきものなり。

坪内博士譯 **ウォーレン夫人の職業**

坪内逍遙 市川又彦譯 **武器と人**

全一冊各六拾錢 郵税各四錢

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一一二三番 **早稻田大學出版部**

賣捌 東京堂・至誠堂・北隆館・盛文館・其他



第二卷　第四號

勞働者と白き手の人

勞働者『何をお前は俺達のとこで探してるんだ。何をお前は求めてゐるんだ。お前は俺達の仲間ぢやれえ。行つて貰はう。』白き手の人『僕は君達の仲間なんだ、兄弟。』勞働者『俺達の仲間だつて。戯談いつちやいけれえ。何をお前は夢みてるんだ。俺達の手を見ろ。何て汚れえこつたか。肥料や瀝青の臭がぷんぷんする。が、お前の手は眞白だ。どんな臭がするえ。』白き手の人（手をさし出し）『嗅いで見給へ。』勞働者（其の手を嗅ぎながら）『これや妙だ。鐵の臭がするやうだ。』白き手の人『さうだ。鐵の臭だ。まる七年間、僕は此手に鎖をつけてゐたんだ。』勞働者『どうして。』白き手の人『君達の爲めを思つたからだ。君達を、憐れむべき無智の者を、自由にしやうと思つたからだ。君達の壓制者に反抗して謀叛したからだ……そして牢に入れられたんだ。』勞働者『牢へ入れられた？なぜ謀叛なぞしたんだよ。』

二年後

同じ勞働者（今一人の勞働者に向つて）『おい、ピヨトル。一昨年俺達と何か云つたあの白い手の男をおぼえてるかえ。』乙の勞働者『おぼえてるよ。あの男がどうかしたのかえ。』甲の勞働者『今日あの男が縊られるんだとさ。お上の命令でれ。』乙の勞働者『また謀叛したのかえ。』甲の勞働者『しよつ中謀叛してたんだ。』乙の勞働者『さうか……れえ兄弟デイミトリ。その縊られる繩を手に入れる事は出來れえかなあ。さうすると大した幸福が來るさうだぜ。』甲の勞働者『さうだ。遣つて見やう。兄弟ピヨトル。』

—（トゥルゲーニェフ　榮譯）—

生の創造

大杉榮

一

『一切の生産方法を社會の所有に歸せしむると共に、商品の生産は排除せられ、それと共に又、生産者に對する生産物の支配が排除せられる。社會生産を支配する混亂に繼いで、自覺的組織が起る。個人的生存競爭が止む。

『斯くして始めて人は、確實なる意味に於て、全く動物界を離れ、動物的存在の狀態から人間的存在の狀態に移る。從來人間を支配してゐた生の條件の總體が、人間自身の指揮と討究との下に移り、始めて人間は、自己の團體生活の主人となり、自然の眞實なる主人となる。

『從來は人間の外にあつて、外的法則として彼等を支配してゐた、人間自身の社會的活動の法則が、人間自身によつて、原因の十分なる智識に於て、適用せられ又統御せられる。從來は自然により或は歷史によつて人間に課せられてゐた團體生活其の者も人間自身の自由なる製作となる。從來歷史を支配してゐた、外的の、客觀的の諸種の力が、人間の監督の下に移る。

『此の時以來、始めて人間は、十分なる自覺を以て自己の歷史を作る。此の時以來始めて、人間の企圖する社會的諸原因が、その大部分に於て、しかも益々增加する比例を以て、求められたる結果に到達する。

『是れ必然の世界より自由の世界への人類の飛躍である。世界のこの解放的活動を成就する、是れ近世平民階級の歷史的任務である。』

僕は今、僕の『生の創造』論をやる一便宜として、社會主義者の間には知れわたつてゐる、エンゲルス著『科學的社會主義と空想的社會主義』中の此の一節を借りて來た。此の一節は又、羅馬大學に於ける社會主義の教授、故アントーニオ・ラブリオーラによつて、その著『歷史の物質的槪念』の結論の中に、社會主義の物質論が含む絕大なる精神論を證せんが爲に、特に引用せられたものである。

二

必然から自由への飛躍的生活!、外的强迫から內的發意への創造的生活!、是れ實に社會主義の理想する最後の目標である。そして又最近思想界に於ける最も鮮かなる色彩の旗印である。

社會主義は此の理想に達せんが爲に、先づ總人の自由なる發達の操作たる各個人の

自由なる發達を、可能ならしむる周圍に到らんと欲して、一切の生産方法の公有を主張した。社會主義が計畫する此の周圍、即ち社會主義的社會に對しては、猶幾多の異論もあり得やうが、兎も角も此の着眼點だけは善かつた。

吾々は個人のない社會を想像し得ないと同時に、嚴密なる意味に於て、社會のない個人をも想像し得ない。從つて社會的周圍を背影としない個人論の甚だ無價値なる事を思ふ。然るに社會主義は此の社會的周圍を過重するの結果、其の社會論から個人的要素を除き去つて了つた。其の理想的周圍に到るまでの各個人の態度に就いて、眞に個人としての態度に就いて、遂に殆んど語る所がなかつた。

社會主義は信ずる。平民の解放は吾々の意志の外にある諸種の事情、殊に工業の發達より生ずる事情に係る。勞働階級の精神的進歩は、只此の解放を容易にするものに過ぎない。新しき經濟が新しき道德を創るのであると。

社會主義は此の所謂物質的史觀説に立脚して、社會進化の要素として經濟的行程、工業技術的行程を過大視するの結果、彼の必然から自由への飛躍を、外的强迫から内的發意への創造を、單に到著點としてのみ强調して、等しく亦之れを出發點としなければならぬ事を忘れて了つた。

經濟的行程が道德を創ると云ふ事を餘りに大まかに主張した社會主義の哲學の前には、豫め各個人の道德的性質を説くが如きは、素より無駄事であつたのであらう。しかし社會主義が躓いたのは結局此の石であつた。僕は先づ、之れを理論の上に於てよりは、寧ろ事實の上に於て見たい。

社會主義は其の數十年間の苦戰惡鬪の後に、其の理論に於ても運動に於ても、益々其の最初の目的と遠ざかり去つた。之れは歐米各國の社會主義史に觀て、恐らくば何等の疑問をも許さない事實である。嘗つては其の味方たりし眞に自覺せる勞働者の群が、今や却つて、之れを敵視し蛇蝎視するまでに至つた。そして其の主たる所因の一として觀るべきものは、要するに社會主義哲學の此の誤謬である。僕はセンデイカリスムの近來の勃興を見て、殊に之れを痛感する。

三

センデイカリスムは言ふ。社會主義は定命的成行(le devenir fatal)ではない。任意的組成(la formation volontaire)である。勞働者が優越せる精神的教化の程度に達せざる限り、社會主義の經濟的變革は實現せられない。新しき道德は現在の社會の中に創られねばならぬのだ。そして此の新道德の力が、新しき社會狀態を可能ならしめるのだと。

更に言ふ。資本家制度の中に社會主義が成熟すると云ふ事には、工業技術的發達を俟たなければならぬのは素よりである。社會主義は、十分に發達した且つ不斷に進歩して行く生産力の上にのみ基く、一經濟組織である。

しかし此の技術的發達は、單に其の一面に過ぎない。そして、より少なからざる重大の他の一面は、舊組織の中に於ける新らしき精神的力の發達である。即ち勞働階級の政治的、司法的、及び精神的諸才能の發達である。

傳習的國家なるものを一掃し去つて、勞働者自身の組織を以て之れに代らしめんとする。斯くの如き大變革は、勞働者の高き精神的修養と、社會の經濟的職能を指導するの才能とを豫想しなければならぬ。され

ば勞働者自身に此の準備が出來た時、即ち自ら社會を經營し得ると感じた時、始めて社會革命が來るのである。

されば勞働者の精神的教育と云ふ事が先づ肝心なのである。勞働者に自ら意志する事を教へ、活動によつて彼等を訓練し、そして彼等自身の才能を彼等に啓示しなければならぬ。之れが社會主義教育の全祕訣であると。

斯くして所謂新社會主義は、『勞働者の解放は勞働者自らの仕事であらればならぬ』と云ふ共產黨宣言の結語を、全く文字通りの意味に復活せしめやうとした。

そして此の『勞働者自らの仕事』と云ふ所に、センディカリスト等は自由と創造とを見出したのである。過去とは絶緣した、即ち紳士閥社會の產んだ民主的思想や制度とは獨立した、又それ等の摸倣でもない、全く異なつた思想と制度とを、先づ彼等自身の中に、彼等自身の團體の中に、彼等自身の努力によつて、發育生長せしめやうとした。

即ちセンディカリスムは、彼のエンゲルスの『一切の生產方法を社會の所有に歸せしむると共に』以下の諸豫想を、先づ自らの中に多少實現せしめて後、少なくとも精神的に實現せしめて後、始めて其の社會的可能を信じ、社會革命の可能を信ずる、センディカリスムの強大なる力は、實に其の源泉を此處に掬み來るのである。

四

運動には方向はある。しかし所謂最後の目的はない。一運動の理想は、其の所謂最後の目的の中に自らを見出すものではない。理想は常に其の運動と伴ひ。其の運動と共に進んで行く。理想が運動の前方にあるのではない。運動其者の中に在るのだ。運動其者の中に其の型を刻んで行くのだ。

自由と創造とは、之れを將來にのみ吾々が憧憬すべき理想ではない。吾々は先づ之れを現實の中に捕捉しなければならぬ。吾吾自身の中に獲なければならぬ。

自由と創造とを吾々自身の中に獲るとは即ち自己の自己である事を知り、且つ此の自己の中に、自己によつて生きて行く事を知るの謂である。

社會主義者はよく、自覺が社會生活を創るのではない、社會生活が自覺を創るのであると云ふ。そして常に之れを誇張する。吾々も亦、此の事實の眞實であり且つ甚だ重大である事を知つてゐる。けれども之れと同時に又、更に其の自覺が新しき社會生活を創るの事實を忘れる事は出來ない、即ち吾々は、種々なる社會的傾向を判斷し、其の中から吾々の內的憧憬と近きもの、吾吾の個人的生活意志と近きものを選ぶの事實を知つてゐる、時としては其等の諸傾向を否認し、超越して行くの事實をも知つてゐる。即ち吾々の權力意志が奮起するの事實を見るのである。斯くして吾々は、自我の、個人的發意の、自由と創造とを思ひ、且つ此處に個人及び社會の進化の基礎を置かればならぬ事を感ずる。

自我は自由に思索し自由に行動する、ニイチエの言へるが如く、彼岸に向ふ渴望の矢である。吾々は先づ、此の自我を、一切の將來を含む此の神祕なる芽を、捕捉し發育せしめればならぬ。

自由と創造とは、吾々の外に、又將來にあるのではない。吾々の中に、現に、あるのだ。

五

自我は活動と反省とによつて、之れを捕捉し發育せしめる事が出來る。そして吾々は先づ、此の捕捉し得たる自我をして、其

の固有の性質たる自由と創造とを、自由なる思索と行動とを、其の爲し得る一切の方面に働かされればならぬ。

斯くして吾々は、始めて其處に、自我と周圍との峻烈なる闘爭を見るのである。新人の恐るべき努力を見るのである。

此の努力と闘爭とのない所に、自我の眞の發展は見出され得ない。自我の强大は此の努力と闘爭との中にのみ求めらるべきものである。自由と創造との理想の進行には、人格の鍛錬には、必ず此の闘爭の野を經なければならぬ。

しかも今日の如き、殆んど有らゆる社會的制度が、自我の壓迫と破壞とに勉むる場合に於て、自我の向ふ所は、此等の社會的諸制度に對する叛逆の外はない。

吾々は此の努力と闘爭との最も偉大なるものを、今日、アナルシストとサンヂイカリストとの運動に見出した。

彼等は、其の生活意志と權力意志との最も强大なる、少數者である。最も多く過去を解脱したる新人である。個人的に又社會的に、最も實り多き又多かるべき、創造者である。

彼等は先づ、一方に思想及び感情の類似或は利害關係の緣を以て、强固なる團結を組織すると共に、他方に其の周圍との斷乎たる闘爭に從つた。彼等の合言葉は此の團結と叛逆とである。

彼等少數者は多數者の無爲と惰情を知つてゐる。多數者が自ら其の自我を捕捉する能はざるを知つてゐる。自働力の缺如を知つてゐる。されば彼等の事を爲すや、決して多數者の所謂一般意志に諜るの愚をしない。彼等は先づ自ら起つた。そして其の大膽なる思想と行爲とを以て、多數者に發意と實例と先導とを與へた。多數者は、自らを運轉せしめて、其の强力なる潜勢力を働かしめる、何等かの衝動力を必要とするものである。

彼等少數者は、何事をも自ら處決し、自ら管理せんとするものではない。多數者を、群集を、出來得るだけ靜穩に、無爲に、柔順に處分せしめんとするものではない。却つて、自分と共に群集を動かす事によつてのみ、且つ群集を直接に闘爭に與らしむる事によつてのみ、其の活動の有效を信ずるものである。又之れによつて、多數者に、群集に、少なくとも其の中の或者に、漸次自我を捕捉するの道を敎へ得ると信ずるものである。

吾々は今此處に、彼等の運動の詳細を論ずるの自由をもたない。又それを論ずる事が此の文の目的でもない。吾々は只、生の創造と云ふ近時の流行語を、多少社會學的意味に解釋すれば足りるのだ。

要するに彼等少數者は、斯くして現存社會の基礎を漸次に崩壞して、舊社會の組織の中に、新社會の要素を發展せしめんとするのだ。そして此の行程の十分に進んだ時最後の大闘爭によつて、其の掘りくづしたる建物を一掃して、彼等自身の中から創り出した新社會を建設せんとするのだ。

此の新社會は未だ其の形式に關する詳細なる案を與へられてゐない。又彼等は其の必要をも感じてゐない。しかし將來の線は、其の大體に於て、現在の發達によつて指示せられてゐる。彼等の運動は明かに『經濟的聯合制度』(le fédéralisme économique)に向つて、其の道に敷石しつゝあるのだ。

『馬盗坊』に現はれたショウの道徳觀

伊庭孝

『同情は罪惡なり』といふ言葉を、嘗てニイチエが放つた事がある。近代的に事物を考案し得る人には、容易に首肯し得べき言葉である。然し此の言葉を了解する人にして、猶、習俗的の意味に於て同情と稱ふ可き種類の行爲をし、或はその行爲に對する欲望（さういふ事がしたくてたまらぬといふ情）の發作するのを自覺する事がある。さういふ人は、常にさういふ心持の傾向が、自分達の腹の中に殘つてゐるのを苦痛におもふ。

支那の學者は、之を惻隱の情と稱した。恐らくその心は同じものであらう。然し、その心の承認の爲樣に於て、丸で反對である。支那哲學にあつては、惻隱の情の存在を先づ承認して、以て世に行はれつゝある道德律の存在の理由となした。道德に對してその權威を疑ふものも、惻隱の情の存在を認めて、その疑をやめたのである。然るに、近代人はそれとは全く異つてゐる。道德的情操 Moral Sentiment の存在を以て、人類の根原なりとして、努力してこれを絶滅しやうとしてゐる。然し、そのあらゆる幻滅的な悟了を以てしても、人間に存する最後の情欲である道德的情欲 Moral Passion の存在だけは認めなくてはならぬ。然して、その道德的情欲があるので、野生の人間をして秩序あるものとせしむる。然し乍ら、その道德欲なるものは、決して色欲や食欲と對立するものではなくて、竝立するものである。竝立しながら、人間の行爲の最後の命令者となつてゐる。故に、徹底偶像破壞者 Consequent Iconocvast にとつて、この情欲の人間に存在する事は、かなり迷惑であるに違ひない。

以上の道德觀は、抽象的な議論として、ショウの『人及び超人』の第一幕のタナアとアンとの對話のうちに書いてある。この情欲の人間に存在すること、及び、この情欲が、ある時は人間の生存欲よりも強烈なる事を、具體的に書いたのが、ショウの『惡魔の弟子』である。而して、この情欲は、人間のいかなる理智の力と雖、壓服する事能はざるもので、實に人間にとつては、横着極まる厄介者で、之あるが爲めに人類は、本當に徹底する事が出來ずに、やはり習俗的行爲を繰り返して、やくざな洒落 rotten game をしてゐるものであるといつて、人間の道德的本能に對して、絶望的な罵倒を試みたものがショウの『馬盜坊』Shewing up of Blanco Posnet である。

ブランコオ・ポオスネットは、浮浪人である。一切の人間界の約束を否認して、それ等を破壞しやうとしてゐる惡魔の弟子である。彼は自分の兄が自分から金を借りて返さないので、復讐的に兄の厩から馬を盜み出して逃亡した。この兄なる者は、職業は牧師であるが、飲だくれで爲樣のない男であつた。病氣をしてから、酒を呑むのをやめて、牧師にして同時に酒場の亭主となつてゐる。習俗的な横着者である。彼は惡い事は、惡い事をするやうにして爲てゐれば、弊害はないと信じてゐる。で、この兄に思ひ知らせるには、彼の所有物を盜むに如くはない。處がその馬は、實は兄

の所有ではなくして、その地方の自治團體の長（シエリフといふ）が、その弟に貸して置いたのを、弟が牧師に又貸をしたものであつた。その結果町中は大騷をして馬盜坊を捜索した。

ミるにこの町にフイミイと稱する淫賣婦が居る。この女が夜から朝まで飮みつゞけてゐると、酒場の前を一人の男がシエリフの馬に乘つて通るのを見かけた處があとでそれが盜人であつたと知れて、フイミイは其の由をシエリフの弟に告げた。シエリフの弟はフイミイの情夫なのである。

ボオスネツトは捕へられた。然し其の時、ボオスネツトは馬に乘つては居なかつた。フイミイがその人だと主張するので、法廷へ出される事になつた。

處が此の町では、馬盜坊は殺人よりも重い罪なりとせられてゐた。それで、馬盜坊は、シエリフが裁判して、有罪なりと決すると、村の若者どもが寄つてたかつて縛り上げて、射殺するのである。即ちリンチといふ私刑に處すのである。若者は樂みにして待つてゐる。

牽出された馬盜坊は、馬を持つてゐない。捕まつた時馬に乘つてゐなかつた。證據はたゞフイミイが、その人の馬に乘つて通つたのを見たといふのだが、證人の身分は淫賣婦であるから、法廷に權威がない。有罪と決定する事は出來ない。

然るに、若者が本當の馬盜坊を連れて來たといふ。見れば纖弱き年増である。年増は自分が馬盜坊であるといつてゐる。フイミイは飽迄ボオスネツトだと主張する。益々わからなくなる。その間に、馬盜坊と年増との對話によつて、馬盜坊は自分の乘つてゐた馬をその女に與へたのだといふ事が分つた。それはその女はデイフテリイに罹つた病兒を醫者に連れていくのに難澁してゐたのである。浮浪人の偶像破壞者の頭の中に、之を助けたいと思ふ情欲の苦痛が起つて來た。心を鬼にする事は出來なかつたのである。それで馬を與へたのである。その婦人が捕まつてゐる。その婦人は病兒が歿したので、命をいらぬものとおもひ、馬盜坊を助けやうといふのである。馬盜坊は女の言を否認してゐる。こゝでフイミイの證言が最後の斷定を與へる事になる。然るにフイミイの心の中にも、既に道德的情欲が起つて來た。フイミイは、馬盜坊を見たる事なしと證言した。シエリフの心にも道德的情欲が起つた。シエリフは、馬が持主の手に返つた以上は、裁判の必要なしと認むと判決した。

馬盜坊の命は助かつた。馬盜坊は自分を私刑に處する事が出來なくて失望した若者共に、自分の近代的な心に發生した道德的情欲の自覺に就て語つた。

馬盜坊はフイミイと結婚した。若者共は牧師の酒場に呑みにいつた。勘定は馬盜坊が拂ふといふので。

文藝界消息

■伊庭孝一座の新劇社は、一月二日より十一日まで、有樂座に於て第二回公演をやる。出し物はイプセン作『社會の礎』とショウ作『馬泥坊』。猶此の前者は、伊庭孝氏が、原作の四幕を三幕と爲し、内容まで全然變へて飜案したものだと云ふ。

■帝大文科在學の新思潮同人は、嘗に小山内薰氏の經營した『新思潮』を復興し、來る二月一日其の初號を出すと云ふ。

露西亞の一癈兵の詩

哀果生

この二篇の詩は、一千九百六年の復活祭の日、『露西亞の一年』の著者ベアリング氏が、モスコウの癈兵院を訪れた時、憐れな一兵士が復活祭の贈物として、氏にわたしたものである。一讀して、その眞純の氣にうたれないものはなからう。これは全部直譯である。

現在

おれは一世紀の四分の一を過した
幸福な日を知らずに。
おれの生涯は脚早やな馬のひく
車のやうにとつとと走つた。
すべての人に神のあたへた
兩親のやさしい情もおれは知らない。
十五年が間おれは商店に暮らして、
金持ちのためにせつせと金を積んだ。
それはおれの二十歳のときだ
新兵にとられたのは。
おれはおれの悲しい苦しみに
をはりが來たのだと思つた。
が、どうして！　そこには不幸がおれを待つてゐた。
おれはあの國で勤務するやうに運命づけられた、
そこでおれは敵にむかふ獅子のやうに鬪はなければならなかつた。
露西亞の名譽のために、おれの愛する國のために。
おれはいつまでも忘れないだらう
あのときを、あの十七日といふ日を、
あの日、遼陽の河のほとりで
おれは永遠におれの兩脚をなくなした。
今おれは何平に滿足して暮してゐる、
こゝにゐればうまい食物と酒とがあたへられる、
しかしおれはむしろ自由な鳥になりたい、
そうしておれの生れた戀しい家が見たい。

過去

おれはおまへに話さう、兄弟よ、

おれの青年時代のことを。
おれは銀を積んだ、
おれは銅などは見たことがなかつた。
おれは愉快で、若くて、うつくしかつた。
おれは愉快で、若くて、うつくしかつた。
おれは愛らしい女を愛した、
おれは裕福に暮した、自由に暮した、
わかい『バリィン』のやうに。
おれは藁の上に寝た、
ちようど小さな豚のやうに。
おれはすばらしく大きな家をもつてゐた、
そこでおれは息んだ。
それは荒れた穀倉だつた、
女達が亞麻を打つところだ。
まいにちおれは浴みした
春の水に。
おれは小さな脛捲きを
タオルに使つた。
酒場にも
おれは好きで行きつけた、
おれはウオッカの飲みやうを知つてるぞと
得意に見せつけてやるために。
今、歳は二十六になつて、
この自由ももうおれのものではない。
おれは荒れた屋根を想ひだす、
そして痛ましい涙を注ぐ。
おれは家にゐたときはなに不足もなかつた、
おれは業務にすこしのつらさも經驗しなかつた。
おれは何か知らうと學問をした、
運命はおれをモスコウへ連れていつた。
おれは恐れと悲しみとの中に暮した、
まいにち、いつも、
そして、自由を思ふとき、
おれの目は泣いてゆがむ。
これがおれの青年時代からの生活だ、
おれは自由にウオッカを飲んだ、
そののちはただ泣くばかりだ。
かうした人間だ、おれは、わかいワニオンシヤ、
おまいの今目の前に見るこの男が
かつては秀麗な氣樂者だつたのだ、
名はロモーヂンといふ。

噴火口をめがけて

徳永保之助

三原山の絶頂をめがけて、
後から後から、
浪の群は首をもたげ、眞白い鬣を海風にふりなび
　かせて押し寄せる。
彼らはまるで曠野に放たれた無数の怪獣のやう
　だ、
「ラヴを破壞しろ!」
「冷たく、凝り固まつて、汝らの地上を蔽ふラヴ
　を破壞しろ!」
その叫び聲は人のたましひをおびやかす。

けれど彼らはわづかに岸邊にのし上つて、
ぬれた砂の上にかすかな黒い線をのこしただけ
　だ、
ずる〳〵と、
イヤ應なしに海の中へ引きヽ入れられてしまふ、

そしてすぐに又、沖に復活して躍り上る他の浪の
　群と一しよになつて、
再び陸へおそひかゝる、
かれらは又ひきずりおろされる、
彼らはかうして年中陸地へ襲撃をくりかへしてゐ
　る、

彼らのねがひは容易に達せられさうにもない、
彼らの願ひ、――彼らは三原山の絶頂の火を戀し
　てゐるのだ、
彼らはかの山上の噴火と合して、
地上に熱湯の豪雨となつてふりそゝぎたいのだ、
熱灰の暴風を吹かせたいのだ、
かくてこの荒れ果てた島を蔽ひつくしてゐる、醜
　い、頑固の舊思想のやうなラヴの厚い層を破壞
　して、
その下にかくれてる、うづもれてる、新しい、實り
　多い土地をひらかんと欲してるのだ、
その土地を太陽の光の下にあらはさんと欲してる
　のだ。

「ラヴを破壊しろ！」
「汝らの地上を壓するラヴの層を破碎しろ！」
彼ら浪の群は努力して倦まない、
毎日々々押し寄せて陸地に戰を挑んでる、
實に彼らはその足を海中にのばしてる黑いラヴの
　巨岩に突撃して、
少しづゝそれを嚙みくだいてゐる、
何日かは彼らもあの三原山のいたゞきに襲ひかゝ
　ることが出來るだらう、
その時彼らは灼熱した噴火口に突入するだらう、
忽ちステキな勢ひで噴出するだらう、
そして粉碎された頑冥なラヴの層の下からあらは
　れた沃野の上に、
夏の夕立のやうにそそぐだらう、
けれど山火と合せんためには、
かれらはかの山巓の、曠漠たる火山灰の原野を辿
　らねばならぬ！

埋め草

安成二郎

×

『半ページあいてゐるから歌をよめ』大杉は歌を侮辱するかな

×

年の暮れの有りがたさよ、わが原稿もいさゝか賣れたり

×

甲武線の朝の電車の花やかさ、じつと目を閉ぢて、思ふは金の事

×

二番目の子のお産の仕度も出來上り春まつ身とはなりにけるかな

×

二番目の子は叔父に名前をつけて貰ひ、養育料をいくらか貰はん

×

來年はもつとどうにかしていくらでも金を儲けんと發奮をする

×

賣文社の窓によりつゝ歌よめば、九十點ばかりの藝者が通る

×

われをしてカーネギーの富あらしめば、安成二郎に百萬やらん

×

かく云ふは、好意の外に何も持たぬ、わが貧乏の一人の友達

×

『新公論』わが貧乏をあはれがり歌を買ひけり、一首十錢に

時が來たのだ

榮

―相馬御風君に與ふ―

御風君。十一月末の『讀賣新聞』にあつた、君の『人間性の爲めの戰ひ』は、近來僕が讀んだもの丶中での、最も會心したもの丶一つであつた。

君があの文の中に紹介した小川未明君の近著『廢墟』は、同君の他の多くの作物と共に、君の言ふが如く『物質力の暴壓力の爲めに極度に虐げられつ丶ある哀れな人間の叫び聲』として、又『主觀的には物質以外に彼等の生活を導く何者もなく、客觀的には物質生活の勞苦以外何者もなき、現代の最も烈しく壓迫された階級の苦しいうめき聲として、』そして又矢張り君の言ふが如く、未明君が單に此の『暗黒裏の詩人』にとどまつてゐるのを甚だ物足らず感じながら僕も亦愛讀したのであつた。

併し未明君の作物其の者に就いて、又それに對する君の批評に就いて、僕は今此處で、君に話しかけやうとするのではない。未明君に對する君の批評、推奬、及び誘導（此の最後の文字は或は未明君に取つて迷惑かも知れんが）は、僕は只、同君が親切なる一友人を有する事を、同君の爲めに、慶賀して置く。

僕が君に話して、僕の喜びと疑ひとを君に傳へたいと思ふのは、あの文中にある君の主張たる『此の根本的な個人革命と同時に、吾々は更に現代のあやまりつくられたる社會組織に向つての根本的な革新を要求する。物質の力を人間性の力以上に置かうとしてゐる現代の社會組織の革新を要求する』に、就いてなのだ。

個人革命と同時に社會革命を主張するのは、僕に取つて、決して初耳ではない。僕自身既に、幾度か此の誌上に於て、寧ろ其の兩者を同一視するまでに論じて來た。近くは『鎖工場』（第一巻第十二號所載）の如き、又本月の『生の創造』の如き、最も之れを力説したつもりのものである。そして今後も猶、僕の新個人主義として或は新社會主義として、飽くまでも闡明して行かうと思ふ、僕自身の主張なのである。僕自身なのである。

此の點に於て、僕は僕の友人を、君の中に見出したのだ。僕の喜びとは即ち此の事である。

『自我の尊嚴』や『生の創造』やは、近時の我が思想界、殊に文壇に於ける論議の基調となつた。尤も此の『自我』や『生』の内容に於いては、多くの論議も未だ甚だ朦朧たるを免かれないのであるが、兎も角も一代の精神が此の人間性の根本に向つた事は、僕等自我論者にとつて、歡喜に堪へない現象である。

けれども更に飜つて思ふに、此の自我論や創造論やが殆んど流行的に主張せられた原因の一面には、僕等の平素最も嫌惡する逃避的態度が含まれてゐやしまいか。之れは逆言めいた觀察ではあるが、逆言は往々にして正言である。

自我論や創造論やの主たる起因は、君の所謂人間性が其の周圍の暴壓に對する叛逆である。然るに現在の多くの此の論者は、周圍の爲めに屈服される事はいさぎよしとせざるもの丶、猶それと戰ふ事を敢てするに至らず、又此の周圍を恐怖するの餘り、それと接觸する事だに厭惡して、遂に一切の周圍、一切の外界に眼を閉ぢて、ひたすらに其の所謂自我の中に、蝸牛が殼の中にとぢこもれるが如く、逃避し去つたものではあるまいか。そして此の殼の中で、或は

すまし返り、或は豪語し、或はベシついてゐるものではなからうか。之れは或は酷評に過ぎるかも知れない。しかし彼等の間にたしかに此の傾向のある事は、若し必要とあれば、僕は其の事實を列擧する事に敢てしりごみはしない。

自我論や創造論やと共に、誰れが周圍論を試みたか、社會論を試みたか、自我の權威の爲めには、生の創造の爲めには、ひたぶるに突進して、一切の妥協と調和とを排斥すると云ふ人はある。けれども其の當然の結果たる闘爭 殊に經濟的闘爭に就ては殆んど誰れもが皆な啞である。盲である。まれに茅原華山君の如き、『萬朝報』及び『第三帝國』に於て、大いに之れを論じてもゐるが彼れはまだ、政治の迷想を解脱しない過去の人である。

僕は、今日の多くの自我論や生論が、其の内容外包共に甚だ朦朧として不徹底なる主たる所以のものを此の周圍、殊に社會的周圍の忘却と及び其處からの逃避とに置かればならぬと思ふ。

然るに君は、此の朦朧と不徹底とから、少くとも大體の形式に於て、脱離して來た君は個人革命と同時に社會革命をも要求した。恐らくは君も、社會革命を無視した所謂個人革命の遂に仇花に終るべき事を知つたのであらう。

けれども僕は、此處まで考へて、再び君の『人間性の爲めの戰ひ』を讀み返した。そして君の社會革命論の根底に、少なからざる疑惑を挾むに至つた。

君は、現代の社會組織をあやまりつくられたるとなし、更に之れを評言して、『物質の力を人間性の力以上に置かうとしてゐる』と云つた。そして之が原因を指示して、『近代に於ける物質文明の急遽なる進歩が主なる原因であるか、或は人間の物質的欲望の過度な増大と云ふ事の方が第一の原因であるか、その何れにしても……』と云つた。

隨分曖昧なる言葉である。尤も言論の自由なき此の帝國に於ては、曖昧なる言葉は屢々必要である。しかしそれにしても之れは餘りに曖昧である。『物質の力を人間性の力以上に置く』も曖昧なれば、次の二原因も共に甚だ曖昧である。殊に其の原因の如きは、もつと遡つて、もつと具體的に觀れば駄目である。あんな曖昧さでは、君の社會科學的知識に、君の文明批評家としての資格に、よし疑惑を挾まれても、致し方がない事になる。

しかし僕は、あの短い文章に於て、敢て多くを求めず、又さまでに君を責めやうとは思はない、僕は、君が社會革命を論ずる以上は現社會の組織に就いて、其の經濟的及び政治的組織に就いて、もつと明確な知識のある事を信ずる。そして之れを信ずると共に、君がもつと的確に、現社會組織のあやまりつくられたる所以を、痛撃しなければならぬ君自身の義務を感ずる。

猶君は『今や新しい戰が開始せられたのだ、時が來たのだ』と叫んだ。そして暗黒裡の詩人小川未明君に、『今や一刻も早く進み出でゝ此の新しい戰に參加しなくてはならぬ』と警告した。

本當に時が來たのだ。未明君がもつとあかるみへ出なければならぬと同時に、君も『黎明期の文學』や『第一歩』から、眞晝間の生の闘ひの中に、第五歩第五歩の中に、踏み出さればならぬ時が來たのだ。

御風君。僕が君の中に見出した友人は、本當に僕の友人なのだらうか。僕が君に聞きたいのは之れだ。

胡麻鹽頭

貝塚澁六

■正月號を正月らしくするといふ雜誌でもないから、舊態依然、胡麻鹽頭を振り立てる事にする。

■『實業之世界』から『こわいもの』といふ題で答を求められたので、僕は(一)死、(二)入獄、(三)飯の食へぬ事、(四)知己友人から惡く思はれる事、(五)女房、と書いて送つた。

■荒川義英といふ二十歲の青年が遊びに來て、是から大いに文學をやる積りだと云つた。彼は僕の古い友人の息子である。僕は先づ彼れの言葉に對して反感を抱いた。然し同時に又、彼れの父が理解し同情せざる點に於て、己は此青年を理解し、此青年に同情してやらればなるまいとも考へた。

■彼れの歸つた跡で、彼が書いて行つた小說の草稿を取上げて見た。せめて二三枚は讀んでやる義務があると思つた。所が、讀んで見ると妙に引きつけられる點がある。五枚十枚スル〳〵と讀んだ。萬皿馬鹿にならぬといふ氣がした。二十枚、三十枚つゞけて讀んだ。頗る面白い所がある。用字などにはメチャなのが澤山あるけれど、觀察の獨創的な奇警な所と、それを發表する句法語法の思ひ切つて新しい所とに、確かに新時代の新人を見る心地がした。それでとう〳〵其の晩の大部分をつぶして、百枚あまりの其の草稿を讀んで了つた。

■翌日になつて考へた。己は彼れの一家を知つて居る。あの小說を面白く讀んだのは其のために生じた感興に過ぎないかも知れぬ。そこで今度は其の草稿を荒畑寒村君に見せた。荒畑君が又中々容易に人を許さぬ男であるが、少し讀んで是や面白い、非常に善く書いてある、などゝ云ひだした。そして是も又とう〳〵全部を讀んで了つた。

■僕は更に其草稿を安成貞雄君に見せた所、是も亦頗る感心して讀んで居た。兎にかく二十歲の青年の筆として、是だけの物が書けるのはエライといふ、僕等のサークルの輿論となつた。

■丁度其の頃、時事新報から、今年讀んだ物の中で最も深い印象を止めた作物を擧げよといふ注文が來たので、僕は早速右の作を擧げて之に答へた。そして此の作者は、一面から見れば一個の不良少年であるが、一面から見れば一個有望の才人である。兎にかく僕は此の一篇に依つて幾許か現今青年の心理を學び得た心地がする、と書き添へて置いた。

■『一青年の手記』と題する此の一篇の文が、今後どこで發表せられて、どんな批評を受けるか知らぬが、兎にかく荒川君は既に二三の知己を得た事だけは確かである。そして僕は此の才人の第一の發見者たるの光榮を有することを喜ぶ者である。

■然し、こんな事からして荒川君が若し譯もなく文壇の流行兒となり、三年か五年の中に相應幅の利く大家並となり、樂に小金も取れて藝妓にも持てるといふ樣な事になるかも知れぬと思へば、僕は何だか今罪を作つて居る樣な氣持もする。早熟早衰、文壇には隨分見苦しい先例が多い。

■藝妓を攻擊したり、男子の貞操を論じたりする事が少し世間にはやつて居る。生ぬるい、徹底せぬ意見の多い中で、僕はフト矢野恒太君の說に眼がついた。矢野君曰く會社の社員は脇目も振らずに其會社の爲に勤務するけれど、社長は外の會社をも掛持する場合が多い。三十六社長などと云ふのさへある。女に貞操があつて、男に貞操のないのはそれと同じ事だと。僕は實に其の

大[illegible]服する。

■矢野君ばかりでなく、一體、資本家、實業家の中には事實を事實として、大膽の觀察を爲し大膽の言行を爲す者が多い。福澤桃介君なども其の一人である。實力に恃む所ある彼等は曖昧な折衷論をやらぬ、胡麻化しの理想論をやらぬ。道學者、宗教家、教育家、僞善者を其の足下に蹂躙するの概がある。さすがに彼等は我々の敵として手答へがある。

■僕の譯した『人と超人』を、伊庭孝一座(即ち新劇社)が公演するといふので、校正中に稽古用としてゲラ摺を持つて行つたりして居たが、其後何かの都合で一時中止になつたらしい。所が、その中止の通知がなかつたので、新聞廣告の文面にウソを書いた様な事になつて了つた。殊に細田枯萍氏譯の『人と超人』もほゞ同時に發賣せられて、その廣告文に『新劇社公演脚本』と銘が打つてあつたもので、チョット妙に感じた人があるかも知れぬ。

■要するに是は、伊庭君が人氣商賣の藝人として、あちらにもこちらにも愛嬌を振りまくつもりで、ツイ少し曖昧な事を云つた結果と察せられる。

■ついでに細田君の『人と超人』に就いて少し紹介しておく。僕の譯書には第三幕が梗概だけにしてあるが、細田君のにはそれが全譯になつて居る。此の六かしい長い幕を全譯にした細田君の骨折に對しては、僕は實に多大の敬意を表する。僕の譯書のみ讀んだ人々に對しては、必ず細田君のをも併せ讀まん事を僕はお勸めせざるを得ぬ。

■リバプールの停車場から出した石川三四郎君の葉書が來た。『僕は去二日に倫敦見物に來た、今歸る途中、停車場に居る、倫敦から百五十哩北方のカアペンターを訪ふた、種々面白い事もある、ブルツセルから申上げる、諸君によろしく、十一月一日夜(明朝ブ府に着く、倫敦はイヤな處だ)

■自殺した山本一藏君の友人で主として其の跡始末の任に當つた深澤岩十君は、其故を以て小學教師の職を奪はれ、今では賣文社に入つて居る。僕はまだ自殺はしないと云つて居る。

■此間僕に宛てゝ『親展』と仔細らしく書いた一通の封書が來た。差出人は一向聞いた事のない名前である。いづれ作文の御注文であらうと思ひながら披見に及ぶと、豈に計らんや、それは電話秘密抵當貸金の勸誘狀であつた。此の年末に際し、賣文社が電話を質に置いて凌ぎを付けるだらうといふ御見込は、蓋し御尤も千萬の次第である。僕は之に對して、人を侮辱したものだなど野蠻な憤慨を發するよりか、寧ろ金貸商人の機敏に感心して獨り窃かに微笑を催す者である。

■賣文社も來年からは又少々發展を試みたいと思つて居る。凡そ今の世の中で商賣をするには、絶えず發展して行く必要がある若し久しく一所に停止するならば、それは既に退歩を意味して居る。而して退歩はやがて滅亡を意味するものである。賣文社痩せたりと雖も、豈におめ／＼滅亡の道に向つて進むべけんや、あゝ誰ぞ相當の資力と經營の才とを抱いて、來つて賣文社に投ずる者は無いか。

■最後に、申し後れましたが、謹んで讀者諸君に對し新年の御祝詞申上升。

冬

荒畑寒村

また冬が來た。これは、私が郊外にひき移つてから、てふど二度目の冬である。十一月の末頃に一と朝、ばかに寒い日があつて、手水鉢にはうすい氷がはり詰めた。

隣りでは、O――が氣管支をすつかり惡くしてもう彼れ是れ一と月ばかり寢て居るのである。私は日の當る緣側に坐つて、床に就いた儘のO――と話し合つた。

『ばかばかしい陽氣ぢやないか、十一月の末に氷が張るなんて、何ていふこつたらう。』

O――は咽喉から胸、脊にかけて濕布をして居るのも構はず、間斷なしに、煙草をスパスパ吸ひながら、

『去年に較べると、よつぽど寒さが早い。』

去年より早いか遲いかはとにかく、こゝい等は土地が市中よりも高臺だし、それに、周圍が曠々とした武藏野だから、市内から見ると、寒さが餘程早くもあり、酷しくもある。

然し、氷の張つたのはたつた一日ぎりで、後はまた暖かい、うら〳〵とした小春日和が續いた。それが、十二月に入つて、四五日すると、また急に寒くなり出して、氷はもう毎日のやうに、手水鉢にも井戸端にも張るのだつた。庭の面の靑苔はすつかり枯れてしまつて、朝は霜柱が一面に立つて居る。紅葉も、櫻も黃にすがれた霜葉をふるひ落し、干からびたやうに晴れた空の下に、冷たく澄みきつた大氣の中に、その刺々しく尖つた梢を張つて居る。そして晴れた日には、垣の外の栗の樹に、百舌鳥の惡戲好きらしい叫び聲が聞え、曇つた日には、雀が胸毛を波立たせながら、軒の亞鉛の樋をカランカラン鳴らして居る。只だ、便所の脇の山茶花だけは、それでもまだ一つ二つ、隱すやうにして花を着けて居た。

毎日のやうに、朝は早くから、近い外山ヶ原で銃聲が盛んに聞えるやうになつた。銃聲はあの曠い野原を圍んで居る杜に反響し、その立樹の距離によつて、疎らな音を立てる。それが一頻りやむ

と、甲高な聲で號令が叫ばれ、やがて烈しい吶喊の叫びが、地殼を破つたやうに高く湧き上る。また時として、騎兵や砲兵等の、いかにも暢氣な悠長な號令が、のどかに漂ふて來る事もある。そして晩おそく、遠くを歸つて往く一隊の兵士の、一人が取る音頭に連れて、歌ふ軍歌の初めの節だけが、はつきり、はつきり、聞えて來る。C——の監獄に在る間であつた。やつと夜業を終つて、薄い布團に柏餅に裹まつて寒さに慄へながら、黒い空を鳥のやうに舞ひ下つて、窓の鐵格子に當る雪の、ドサッ、ドサッといふ重さうな音を聞いて居ると、遠くの方を、やはり此のやうな軍歌の聲が通つて往くのだつた。

『此の頃よく遲く、兵隊が軍歌を歌つて往くネ。あんなにまで、何をして居るんだらう。』

翌くる朝、運動に出た時、私は審かにこうM——に囁やいた。

『ア、あれア兵隊かネ。僕はまた、近所の子供か小學校の生徒かと思つた。』

『鍋燒うどんの聲なんかも聞えるんだゼ。夏は明笛だの、尺八だのゝ音が聞えて、陽氣だつたがねえ。僕ア、鍋燒うどんの聲を聞いて、大に悲觀しちやつたア。』

G——も笑ひながら云つた。まつたく、此の頃の寒い夜、あの兵隊の軍歌なんか聞くと、あの頃の生活が、すぐ記憶に浮び出るのである。

郊外は市中に較べると、空氣の乾濕の度も非常に異ふやうである。もう此の頃は、私が京橋のB——社に出かける時分、まア大低朝の十時か十一時頃は、霜解けて路がひどく泥濘(ぬか)つて居るが、夕方歸つて來る時となると、それがすつかり凍つてしまつて居るんだ。だから、あのS——の踏切が縮つて居て、一寸開きそうにも無い時は、踏み減されて節ばかり高くなつて居る陸橋(ブリッヂ)を超えるのだが、雨ふり揚句なぞには、橋板の凹みに溜つて居る泥水が凍つて、危なく辷らうとすることも度々である。然し、夕方京橋から歸る時、よく深い靄に包まれて居る市街を通つて來るが、郊外に來ると靄はほとんど影を止めないで、うす蒼い月光の下に、屋根は露に濡れて白く、銀蛇のやうな甲武線の軌道は、黒い城のやうに連なつた杜に沿ふて

走つて、皆なはつきりと輪廓を劃して居る。市中の夕靄は、行人や、街路の並樹や、馳せ交ふ車馬をば、まるで乳白色の紗でも透して見るやうに、淡く、朧ろに見せるのだ。郊外に在つては、大氣が水蒸氣によつて重い時、外山ヶ原の一角を繞つて、樫や、榛や、櫟や、栗の疎林を縫ふ汽車の煙は、高く上らふとして水蒸氣に壓せられ、低く樹立の間をさ迷つて幹にまつはる。

毎朝、B——社に入るのに、私はO——驛から一と丁場のS——驛まで、甲武線の電車で往き、それから更に市内の電車に乘り換へる。そしてあの陸橋を超える時、いつもふり返つて西の空を眺める。廣い青梅街道は、煤けた家並の間を長く伸び、煙草製造工場の赤煉瓦の建物は、葉を振ひ落した鋭い樹梢に圍まれて居る。その先には、貯水池の二基の大煙突が、家々の屋根を抽いて空高く聳え、遠い國境には、夢のやうに連つて居る山々が、紫紺色の襞を重ね合ひ、富士はその兩肩を被つて居る白いガウンによつて、僅かに天の碧から見分けられる。私が此の郊外に移つたのは、てふど去年の秋の末頃であつた。電車の音は絶え間無く聞え、長い貨物列車の通る時なぞは、その脉打つやうな重い地響きに、家の戸障子までガタガタ搖れた。近くの林を木枯しが吹き過ぎると、その度毎に土に塗れた落葉が、カサコソと縁の下に揉み合つて音を立てる。夜は、月の光に林や樹立が銀のやうな色に曇り、梟が時を置いては寒そうに啼いた。その頃も今と些しも變らず、毎日急しい思ひをして暮して居たので、秋から冬に入つて往く自然の、聲も無く歩む足音や、音も立てずにすませる着更へなぞは、ほとんど私の眼に止まらなかつた。一晩、ばかに寒い事があつたが、翌くる朝、私は冷たい縁に素足を爪立てゝ、灰色の天の下に厚く積んで居る雪を、驚いて眺めて居るのであつた。O——驛の蔽ひも無いプラットホームには、電車を待つ一群の人々が、深々と立てた外套の襟に顏を埋めて、寒そうに口から白い息を吐いて居た。まつ黒に燒いた木柵は、まるで白い帽子のやうな雪を戴いて序列正しく並び、貨物を蔽つた莚の上に、雪がところ斑らに消え殘つて居る貨車と、僅かばかりの客車とを聯結した八王子行の列車は、モクモクと暖かそうな白煙を灰色の空に

散しながら、樺色に枯れた雜木林を縁どつた、雪に蔽はれた長い堤に沿ふて、重さうに、ノロノロと進んで往く――。

　こういふやうな郊外の冬を、私はこれで二度迎へる譯である。朝出ると夜でなければ歸らない、その日その日の追はれるやうな生活の中に――。

　或る朝、私がB――社に出ると、もう社員は皆な揃つて事務をとつて居た。

『どうだつたい、昨夜の茶話會は…。』

　隣の机で、圖案の意匠を凝らして居るM――に、私はこう話しかけたのだつた。

『ウム、T――がネ、O――君とA――君が居ないから張合が無いがつて、直接行動に反對して議會政策を主張したヨ。』

『ハヽア、T――もやつぱり代議士になつて、二千圓の歳費にありつきたいのかナ。』

　窓硝子を透して机の上に流れる、うす碧い朝の日光を浴びて椅子にのけぞりながら、私はこう云つて笑つて居た。そして、やりかけた儘放つて置いて、期日の切迫して居る仕事にかゝつたが、いつもの癖で、氣ばかり焦つて些とも捗どらないのであつた。

　正午過ぎ頃、法被(はつぴ)を厚く着込んで、廂のとれかゝつた大黒帽を冠つたN――が、商人風の男を二人連れてやつて來た。そして、事務室の前の火の氣も無い處で、社長のS――に二人を紹介(ひきあは)せた上、一個テーブルを圍んで彼等の窮狀を話し出した。此の二人は、銀座に夜店を出す貧しい露店商人だつた。寒い風が大路の砂を捲くやうになつては、街を往く男も女も、側目もふらずに小走りに過ぎて、鋪石道に薄い毛氈を敷いて坐つたり、よしずの臺の後に立つて、安物や古道具なぞを並べて居る彼等の店は、顧みる者も無い位である。彼等は外套を着て手袋をはめた男や、コートを着て肩掛をした女たちの、セカセカした歩き振を眺めては、一日一日と迫つて來る貧しい暮を思はずには居られなかつた。

『もう、もう、私共の商賣は夏中だけです。これからは寄席がコム代りに、私共は全く上つたりです。其處へもつて來て、こういふ始末なんですから、途方に暮れて了ひましたんで。どうか一つ先生の御盡力をもちまして、お助けを願ひたいと存じまして。』

　若い方の一人がこう云ふと、老いた方の男も口の中で何かクドクド呟やきながら、一緒になつて頭を低げた。

　彼等は此の暮れに押し迫つて、警視廳から突然、道路の妨害になるから一定の期限を過ぎれば、露店を禁止するといふ命に接したのであつた。是は既に窮境に陷ゐつて居る彼等をば、更に深淵に蹴落すやうなものだつた。彼等は寄々相談した上、及ぶ限りの手を盡して見たが、如何しても陷りかけた深みの中途で踏み止まつて、再び地上に攀ち登る事が出來なかつた。それで到頭N――の處へ善後策を持ち込んだのであつた。

『あいつ等ア、いつでも弱い者虐めばかりして居やがる、此の暮れに押し詰つて、しが無い商賣を禁めたりするなア、まるで首縊りの足をもつて引つぱるやうなもんでサ。どうして、アヽ、底意地が惡いんだらう。』

　N――は自分の事でゞもあるやうに、ムキになつて怒つて居る。

『それア諸君の事情もお察しするし、及ぶ限りの御盡力はしますが、然し他の事ぢや無い、君等の身の上なのだから、畢竟は君等自身で解決しなくちやならない。助けて呉れろと云はれたからつて、私に如何する力もありやしない。私は只だ眞の一臂の力を藉すだけで　運動は君等自身でやらなくちや……。』

S――がこう云ふと、若い方の男は益々低頭した。

『どういたしまして、却々もちまして、私共にそんな力はございません。私共がいくらやつて見　した處で、テンで相手にされません。現に先達ても警視廳へ参りまして、係りの役人に會つて、色々事情を陳べたんですが、頭から馬鹿にしきつて居て、人間らしい扱ひはしやアしません。鼻の先であしらつて、追ひ歸してしまふんですから……。』

それから、春先に向つてなら知らぬ事、此の暮に押し迫つて禁止されては、立つ瀬が無いといふ事や、皆な女房子のある身で、此の商賣が禁められゝば、その日から食ふに困るといふ事や、新らしく他區へ露店を張るには、少なからぬ費用が要るといふ事や、それに何よりも、露店が決して道路妨害にならぬといふ事なぞを、猫もクドクドと述べ立てゝ、陳情書に書加へて貰ひたいと、泣くやうにして頼んだ。彼等はまるで、一枚か二枚の陳情書が、役人等の冷たい岩のやうな心の奥から、暖かい人情の泉を湧き上がらせ、彼等を此の差し迫つた窮厄から救ふ奇蹟を表はす力があると、堅く信じて居るやうだつた。

N――等が歸つて往くと、S――は額をしかめながら、事務室に戻つて來た。

『實に氣の毒なもんだが、ア、他人にばかり頼つて居ちやしやうが無い。助けて貰はうとばかりして、自分達で運動する決心が些とも無いんだから。あんな時に、ウムよし、親船に乗つた氣で居ろとでも云や嬉しがるんだらうが。』

投げ出すやうにそう云つて、空いて居る椅子へ腰を下した。

『麹町の方では、また露店を許すなんて新聞にあつたのに、どうして銀座の方を禁止するんだらう。』

誰かこう、不審そうに云ふ者があつた。

『畢竟そうして、失業者と小盗人を澤山こしらへるのサ。他にやる仕事が無くなつて、てふど手空きになつたからだらう。』

ペンを走らせながら、皮肉を云つて笑つた者もあつた。

『然し、車夫仲間ばかりぢや無い。あゝした露店商人まで、手に餘つた事は、N――の處へもち込むから偉いもんちやないか。』

N――の書いた陳情書の草案を讀んで居たS――は、心から感心したやうにそう云つた。

暫らく事務室は、露店禁止問題で賑はつて居たが、それもやがて忘れたやうに消え去り、皆な自分の仕事しか考へて居ないやうに默つてしまつた。

日光は向ふ側の家並に移り、葉の散り盡した梧桐や柳の影が、狭い歩道を横つて屈折し、更に家家の塀や牆に印せられた。穏やかな午後の日に照されたD――通信社の、仰ぐやうに宏壯な石造の建物の下に、土方が只だ一人、鶴嘴をふり冠つて

は打ち下して、堅い土を掘り返して居る。その正しい間隔を置いては響く、堅い地面を打つ鶴嘴の音が、鈍い寂しさを傳へて來る。そして、時々近くの通りを自働車の馳せ往く音がして、ガソリンの臭ひが、程經てから微かに面を掠める。往來はさも單調に倦んだやうに横はり、土は乾いて白ちやけて居た。

『君、E――から手紙が來たョ。』

M――はかう云つて、讀み終つた一通の手紙を私　渡　た。E――、南方のN――市に近いI――監獄　、いつ自由の身になれるといふ望みも無く、佗しい月日を送つて居るE――。二た月に一回づゝ出す事を許されて居る書信は、彼の弟の手を通じて、最も親しかつたM――に廻されるのだつた。

『君が送つてやつた本の、禮も書いてあるョ。』

M――は、E――の弟に返書を認めながら、さう云つた。私は様式に親しみのある、監獄の書信用紙にサヽくれた筆で書いた、E――の手紙を讀んで往つた。

それには、老父母や、弟妹の安否が尋ねてあつた。『エンシェント、ローム』や、『ロメオ、エンド、ジュリエット』や、『マンス、プレース、イン、ネエチュア』を讀んだ感想も書いてあつた。そして、トルストイの『レザレクション』に對する感想の中に、かう記してあつた。

『……檢擧の前夜、三人連れて活動寫眞を見に往つたのが、此の黒い長い冬枯れを語る、僕が晩秋の唯一の紅葉であつた。其の一人は、永劫に變らない友。他の一人は、かういつた手段を擇んで、世を渡り往かねばならぬ婦人であつた。……』

早いものだ。あの事件が過ぎてから、もう滿三年にもなる。その頃、私はU――區の下宿に居た。夏もまだ淺い朝、少さな崖の下になつて居る室で眼をさますと、私はいきなり、暑苦しい蟬の鳴き聲を聞いた。私は雨戸をくつて、寢ながら新聞を讀み出した。そして三面の電報欄で、E――や、M――や、T――等の、大阪の同志が檢擧されたのを見た時は、重い梶棒か何かで頭を撲たれたやうに、熱いものが後腦に上るとクラクラとして、眼の中がまつ白になつたやうに感じた。出獄してまだ間も無い私は、K――等の檢擧によつて尠か

らず神經が昂ぶつて居た。それが今、大阪の同志等の檢擧を知つたので、私は二種の激情を感じた。一つは此の檢擧が全國に亘るもので、事件の關係の有無に拘はらず、個人的關係を有する者は、皆な檢擧されるといふ意識であつた。もう一つは、M――に對する深痛な悔恨であつた。K――の事件が起る些し前、警察の干渉で職を奪はれたM――を、無理に奨めて大阪にやつたのは自分ぢや無かつたか。私にしろ、M――にしろ、固よりこういふ事の起らうとは豫期しなかつた。隨つて、私はM――の檢擧に對して、何の責任も無いものである。然し乍ら、M――が若し今暫らく苦痛を耐へて東京に止まつて居たら、或は此の災禍を免がれたかも知れないと思ふと、私は堪へ難い感がして、居ても立つても居られなかつた。グズグズしては居られないといふ心と、M――に對する慚悔の念とが、胸の中で火のやうに爭ひ狂つた。

『こうしちや居られない。俺は坐して汝(きさま)の毒手を待ちやしないゾ。汝の毒手が先に俺に届くか、俺の復讐が先に汝に及ぶか。待つて居ろ！。』

私は熱い涙を新聞紙の上にそゝいだ。そして、心の中でそう叫んだ。

それから、それから私は如何した?。それを書いたり、云つたりする自由は無い。それだけは、私の胸一つに納められてあるべき、悲しい、憤ほろしい祕密だ。私は夏中二た月、驅り立てられた獸のやうに、喘いだり、慄へたり、昂奮したり、落膽したりして駈け廻つた。私は夜おそく安宿に泊り、朝は早く飛び出して、オチオチ眠る事も出來なかつた。金が無くなつて、飯の食へない時が幾度もあつた。私は近づいた――、歩み寄つた――、認めた――。そして私は再び、群衆の間に絶望して泣いて居る自分を見出した。到頭しまひに、私は過度の疲勞と、昂奮と、困憊との爲めに、何も望まなくなつた。只だ何ものにも煩はされない、休息だけが欲しくなつた。私は敵に此の體を投げつけて、その手に運命を委ねてしまひたくなつた。全國に亘る同志の檢擧は、益々烈しくなつたが、大坂ではM――だけが自由の身となつた。私はホツと息を吐いた。そして心も體も弱り拔き、疲れきつて居る私はまるで凡ての同志が自由となつたか、或は私の果すべき義務を完全に仕遂げたやうな心安さを感じた。或る晩、私は竊かに、靈岸島からB――通ひの汽船に身を投じた。黑い海の上に、舷側を近づけて浮んで居る船からは、青や赤の燈火が水に落ちて搖れて居た。艀船の行く手に當つて、四角な赤い口が浮び、そこ等からは人々のかけ聲が聞えて來る。近づくと、それは荷物を積み込む爲に、汽船の船腹の鐵扉が吊り上げられて、內部の火光が見えたのであつた。私は腥い魚荷の臭氣や、劣等な機關油の惡臭が、火爐の溫氣に混つて、胸苦しいやうな大氣を作つて居る、天井の低い

下等室で、大勢の客の間に横はつた。品川の鼻を出切ると、もう東京灣の波は、初秋の風に荒れて居るのであつた。

そんな事も、もう三年の昔となつてしまつたのだ。死一等を減ぜられて、無期懲役に處せられたE——は、他の三同志と一緒に今はI——監獄に自由無き月日を送つて居る。そして、その中の一人で、醫師だつた青年は、既に發狂してしまつて居る。その外T——は相變らず脫腸に苦しんで居るといふが、E——は別に變つた樣子も無い。然し、心の苦しみに至つては、恐らく彼が最も烈しく惱んでは居まいか。『永劫に變らぬ友』であるM——は、今も猶ほ忠實な友であるが、『他の一人』は、既に彼に背いてしまつた。E——の入獄後、永い間彼と同棲して居たH——が、男に欺されたとか、貯金を捲き上げられたとかいふ噂を、私は何かの折に耳にした事がある。今年の正月、私が大阪へ往つた折、T——の家で圖らずH——に會つたが、E——の事は云つていゝか惡いか解らないので、遂に一語も云ひ及ぼさなかつた。體も肥り、柔かい物なぞ着て、E——と一緒だつた頃とは、まるで見違へるやうになつて居た。

『H——は近い中に、何處とかへ出て居る男と、結婚するつて云つてるそうだ。』

T——の家を出てから、M——は私にこう云つた。私は獄中のE——が、果して外の事情を知つて居るだらうか、或はまだ何も知らないで、H——の生活といふやうな事に心を痛めて居るのぢやあるまいかと思つた。そして、表皮が剝がれて赤肌になつて居る身體の一部に、觸れなければならないやうな痛々しさを感じた。が、彼はもう知つて居る、自分の享受し得べき愛情は、只だ永劫に變らない友情だけだといふ事を——。檢擧の前夜、無心に妻や友と活動寫眞を見に往つたのは、眞實に彼の生涯の最後の想ひ出となつた。それが最後の自由、最後の愛であつた。

然し、固より私はH——を責めやうとも思はなければ、また賤しみもしない。E——はいつ自由になるとも解らない、いや、終生自由にならないかも知れないのだ。その望みも無い永い月日を如何して女の細腕で凌いで往けやう。それも達者な身で、金でもあれば知らぬ事、あの病ひの多い纖弱い身で——。

あの事件の起る年の春、私はC——監獄を出ると、すぐ大阪へ旅行した。そして、てふど二年ぶりで、大阪の同志と歡談したのであつた。その頃E——は警察の干渉が激しい爲に、或る工場を解雇された當座だつた。私は北區の煤けた場末の町に、彼が夫婦で間借をして居た二階を訪れた。周圍はゴミゴミした紡績工場が多く、夕景になると、家の前の細い漏路を、女工が喧ましく喋べりながら通る。天井の低い、日の徹らぬ一室に、夫婦は貧しい生活をして居た。E——が失業して居る上に、H——は胸が痛むと云つて、工場は出たり休んだりして居た。それでも、私の存外達者なのを喜こんで、鯨と水菜を煮て馳走したりした。私はE——に上京を勸めた。是は彼を二重に喜ばせた、一つは上京さへすれば何か仕事が見付かると思つたから。また一つは、幾年ぶりかで懐かしい東京の土を踏む事が出來るから。まして其處には、M——だのF——だの、彼の親しい同志が居るのだから。

私とE——とは、遂に一緒に上京する事になつた。夜汽車の三等室で、狹い腰掛に掛けた儘、さも疲れたらしく眠つて居る彼の顏を眺めて居る中に、私は先刻、彼が停車場で、

『今日はバカに胸が痛むんだそうだが、別れ際が辛いからつて、H——メ、無理に工場へ出て往つた。』

と云つた語を思ひ出した。すると、熱い涙が眼ににじんで來た。彼は正直な、勤勉な勞働者だ。それが、單に社會主義者であるが爲に、職を奪はれて旅に出なければならぬ。そして彼の妻は、病を押いて工場に出る——。何といふ痛ましい、何といふ悲しい事實だ。私は、疲れた顔をして眠つて居る彼を呼び醒して、手を握り合つて泣きたいと思つた。

三月の末の或る朝、私達が新橋に着くと、M——が出迎へて居た。電車に乗るのが惜しいやうに思はれて、温かい日光に烟つて居る銀座の並樹道の綠蔭を、歩きながら話しつゞけた。M——とF——とは、その頃、寺島村に小さな家を借りて自炊して居たので、私は暫らく其處に落ち着く事にした。F——とM——とは、毎日大川端の印刷工場と、新橋の方の新聞社とに通つて居た。E——は新聞の廣告欄を見たり、市内を歩き廻つたりして職業を探したが、思はしい仕事は却々見つからなかつた。私もE——も、M——とF——の厄介になつて居るのを心苦しく思ひながら、日は慌たゞしい想ひと、悔恨の情とのみを殘して、容赦無く去つて往つた。墨田堤の花がいつの間にか散つて、青葉の色や若芽の香は、痛いやうに目を刺戟した。私とE——とは、だんだん仲が惡くなつた。二人は詰らぬ事で、よく喧嘩をした。武者ぶりついて往く私を、彼は冗談半分に押へ付けて、身動きもさせなかつた。私は組み敷かれた儘、夢中になつて罵つた。終ひには、歯を噛んで口惜し泣きに泣いた。始めは笑つて居た彼も、私が餘りに眞劍なのに、驚いて手を放してしまふ。

『何だ、冗談だと思へば、本氣になつて怒つてやがる。まるで餓鬼だ、見つともない。』

そう云つて、苦笑して居た。

夏の初めになつた。E——は如何しても仕事が見付からないので、また大阪へ歸ると云ひ出した。私達は一應は止めたが、然し止まつた處で、如何するといふ的（あて）も無いので、遂に彼の意の儘に任せた。E——が歸阪してから、私達の身にも種々な變化が起つた。第一に、M——が警察の干渉の爲に失業したので、私は彼を說いて大阪に赴むかした。それから、私もF——も、寺島村の家を疊んで、別々に下宿するやうになつた。M——とは、しよつ中手紙の往復をして居たが、或る時フトした言葉の行違ひから、私は手紙の上で迄も、E——と云ひ爭つた。そして、互に不快な感情を深く心に根ざして、いつ迄も解ける折が無かつた。K——の事件が勃發して、M——や、T——や、E——等が、皆な檢擧されたのは、實にその夏の中ば頃だつたのだ。で、愈々E等——の裁判が確定して、先の永い生涯を、希望も光明も無く、牢獄の裡に老い朽ちさせればならなくなつたかと思ふと、もともと根も葉も無いだけに、私はE——と不愉快に別れたのが、堪へ難い悔恨となつた。然し、二た月に一回の書信で、それも親族のみに限られて居て、如何して慚悔に心を蝕まれて居る私の感情を、彼に知らせる事が出來やう。私は想ひ出しては、いつも空しい悔に責められて居た。

十一月の初め頃、倫敦のR、P、Aから送つて來た書籍の中に、既に手許に在るレッキーの『ヒストリー、オブ、ユーロピアン、モーラル』の上卷があつた。私は此の餘分の書を如何し樣かと思

つたが、フトE――に差入れ樣と思ひついて、M――に他の書と一緒に送つて貰つた。勿論、E――が之に對して、どう思ふだらうかといふ事を、私は輕い好奇心をもつて想像して居た。

『…ユウロピアン、モーラルは、A――君の寄贈の由、突然この惠施に與かつた僕は、冷灰の中から上つた火焔を見たやうな心地がする。此の奇蹟に對する僕が驚愕の念は、同君もあらかじめ推察したことであらう。…』

彼はそう書いて居た。冷灰の中から上つた火焔――、奇蹟に對する驚愕――、彼はこういふ語で、どんな感情を云ひ表はそうとしたのだらう。不快な感情を抱き合つて別れた友が、いま突然、書籍を送つて來たのを見て、單に驚いたに過ぎないのであらうか。それとも、もつと他の意味て眞實に冷灰の中から、火焔の上つたのを見たのであらうか。一個の友人が自分を忘れなかつたのを喜こんだのであらうか。或は一個の同志が、猶ほ健在なのを知つて、彼等が犧牲となつたコーズの爲に喜こんだのであらうか。

『I――あたりは、こつちに較べていくらか暖かいだらうか。』

私は手紙をM――に返しながら、誰に聞くともなく云つた。

『それァ、こつちよりはよつぽど樂だらう。』

『そうだらうか。然し、是れから寒にでも入つたら、監獄はやつぱり寒からうなァ。』

『それア、そうサ。こうして居るやうな譯にや、到底往かないよ。』

皆なは笑つた。私も笑つた。それが全く、當然の事でゞもあるやうに――。

けれ共、どうして『こうして居るやうな譯に往かない』のだらう。何故、私達の同志は、同胞は、同じ多くの人類は、自由に日光を仰ぎ、自由に談り、自由に笑ふ事が出來ないのだらう。石壁にとり巻かれた狹い監房に、只だ一人、生涯を住み暮すといふ事があり得やうか。恐ろしい、また實に、非道な事だ。私達がまだC――監獄に居た時分、或る朝いつものやうに、芽を出した蒼桐の稚木が、列をなして並んで居る運動場に出て、石炭屑を敷いた土を踏んで歩いて居た。濕つた天は輝やき渡つて、茶褐色の煉瓦塀の彼方を、カラカラと空車の過ぎ往く音がする。それに連れて、若い男の粗雜な話し聲も…。私は、出獄後發狂して死んだM――に、

『こんな物を建てゝ、人間を十年の十五年のつて閉ぢこめて置くなんて、實に殘酷な事ぢやないか。』

と云ふと、M――は、

『全くだ。こんな處へ十年も入れて置かれるよりは、寧そ殺された方がよつぽどいゝ。』

と云つた。それが、是は十年や二十年ぢや無い、生涯なのだ。死ぬ迄なのだ。あの無智で、冷酷で、粗野な獄吏どもに、死ぬまで絶えず凌辱され、獸のやうに扱はれなければならないのだ。

そして冬！、寒さに眠られぬ夜の續く冬！。それはたとへ、C――やA――の監獄のやうに酷くは無いとしても、やつぱり強い力をもつて襲ふのだ。私は冬の午後、一番おそく入浴に往つた時の事を想ひ出す。それは雪催ひの日で、暗い灰色の空は長い煉瓦塀の上におつ被さつて居た。O――と、私と、私達の仲間でない囚人が一人、最後の番に廻つた。私達が囚衣を半ば脱いで、慄へながら浴場に立つて居ると、看守が附き添つて、一人の囚人が蟲の這ふやうにノロノロと歩いて來る。そして何といふ顏だつたらう、土氣色をした頰はやせこけて、眼瞼や、鼻のわきは、藍を塗つたやうな黑い線に刻まれて居る。脣は氣味惡いほど赤い色をして、ギヨロギヨロ光る眼は、的も無くさ迷つて居る。が、もつと私を驚かした者がある。手は手錠で確かり幅の廣い帶に縛しつけられ、帶からは更に足を傳はつて二條の鎖が垂れ、くるぶしに箝つて居る環を通つて、二個の大きな鐵の釻を曳きずつて居る。それは全く、幽靈が私の方へ歩いて來るやうだつた。

『おい、マアあれを見ろョ。』

私は向ふを向いて居る。O――に囁やいた。

『人間が人間に對して、よくあんな殘酷な眞似が出來るネ。』

O――はふり向かないで、吐くやうに云つた。

私はO――が、既にその男の姿を見た、そして、見るに忍びないで、向ふを向いたのだと思つた。

私は今でも網膜の底に、幻覺の樣にE――の瘠せた顏を見る。そして、耳の底には、あの哀れな囚人の、鐵の釻を曳きずる鎖の響きを――。(完)

人間屠殺所

ラムスズス作
佐藤綠葉譯

豫告に從つて『人間屠殺所』(Menschenschlachthans) を本號から引續いて譯する事になつた。原書で百十一頁、英譯で可なり長い序文を加へて百十六頁しか無いものだから、四號か五號で完結するだらうと思ふ。本書の内容及び著者 Wilhelm Lamszusに就いては、昨年の本誌八月號に一寸書いて置いたが、あれ以上別に附け加ふべき知識を持つてゐない。たゞ一言したいのは、本書の獨逸に於て發行せらるゝや、數日の後著者は――さながらバイロンが或る朝突然自分の有名になつたに驚いて醒めたと同じやうに――自分の高名になつたのを發見したといふ事である。著者の經歷に就ては私は何の知る所もないが、獨逸のある公學校の校長で、本書を公刊すると同時にその職を退いたが、やがて又復職したといふ事だけは分つてゐる。著者には本書の外に數篇の散文詩の創作がある。和蘭の民謠に形どつてネザーランドの自由を歌つたもの、果樹園に白い風が吹き、林檎の花が咲き、其枝の下で若い男女が戀を語るやうな作がある。千九百十二年瑞西のゼネヴァに開かれた第十四回萬國平和會議では、秘書ドクトル・ウェストパール氏が同會を代表して、本書の著者に感謝狀を送つた。『人間屠殺所』が人類の平和のために書かれたからである。最後に私は之をオークレー・ウィリアムズの英譯から重譯したのであるが、一種特別な文體であるために、甚だ飜譯に骨が折れた。それに兵語が多いので、それにも少なからず困難した。譯文の拙いのは元よりだが、意味の不徹底な處や、誤譯の個所にお氣づきの方には、是非御注意を願ひたいと思ふ。

一　動員

戰爭！　宣戰が布告された！　この新聞は非常な勢で街々を驅けて行つた。吾々は戰時の人である。今やそれは事實である。

動員！

揭示場には不祥な文句ばかり張り出された。新聞紙は最大の活字で宣戰の布告を轉載し、いろんな噂や、通信は、波立つた鳩小舍のやうに、此の血と鐵の日を吹き廻つた。

非常に眞面目な事である。そして嚴肅といふ感じは、此の國を、痲痺症の打擊のやうに痲痺せしめた。併し次で突然の震動が、槓杆を投げ出したやうに、廣い製鐵工場に響き渡つた。そしてあらゆる人が、その震動に動かされた。不安と逡巡の時は過ぎ去つた。疑問と動搖の時も過ぎ去つた。今や吾々は市民で無くなる時が來た。これから吾

吾は兵士である——考へる時を持たず、たゞ死をのみ思ふ兵士である。

かくして彼等は工場から來た。製造所から來た。帳場から、事務所から、また廣々とした田舍から來た——彼等は此の町へ集つて來た。總ての人が祖國のために起つべく整列した。

『日附より四日以內』と、私の召集狀に書いてあつた。第四日目の朝が來た。私は妻と二人の子供とに左樣ならを告げた。あゝ、第四日目の朝が來た。別れるのは容易では無かつた。

『家に於ける』彼等を思ふ時に、私の胸は疼いた。

『何處へ行くの、とうちやん?』手に旅行鞄を持つて、最後のキスをしてやると、嬰兒はかう云つて訊ねた。

『とうちやんはね、遠い處へ行くのですよ。』母親はかう云つた。そして眼に淚をためて、微笑みながら私を見た。『ね、とうちやんは遠い處へ行くのですよ。ですからね、お孃ちやんも、お前ちやんも、おとなにするのですよ。そして母ちやんの言ふ事をきくのですよ。』

そこで吾々は急いで別れを告げた。ドラがいつ迄も引つ張つてゐるからである……。

扨、吾々は鞄や小荷物を持つて兵營に集つた——吾々兵卒——吾々豫備、後備の兵卒は、すべて其の各々のテーブルに就いた。

何といふ眞面目な顏だらう。彼等は若々しい元氣や、軍人らしい誇りの痕跡すらもあらはしてゐない。彼等の表情は、寧ろ深く考へ込んでる記をあらはしてゐる。

『最後の戰爭は當然來るべかりしなり』——かう吾々は人からも聽き、また新聞でも讀んでゐた。

『かく成らざるべからず、そは自然の法則なればなり。兩國民は互に他の口よりパンを奪はんとし、彼等は互に同じ空氣を呼吸せんとして爭ひつゝありき。かゝる結果は、たゞ腕力によつてのみ解決せらるゝなり。而て若し然りとすれば、今日に於てなすは明日爲すよりもよければなり。』

吾々は最早傭兵では無い——金錢のために全然その血を賣つて了つて、人を殺すために傭はれたる傭兵ではない。吾々は最早格鬪士では無い——富豪の娛樂のために刺戟的な光景を見せ、彼等の

眼を喜ばせんがために、死のドラマを演ずる奴隷ては無い。吾々は、吾々の祖國のために誓つたのてある。そして愈々といふ場合には、吾々は、吾吾の行ひに十分な意識と、十分な責任とを以て、市民として死なうと決心したのである。

これからの五六日は、吾々のために何が貯へられてゐるだらう？

恐らく吾々の中一人も、曾て、自分自身の眼で戰場を見た者はあるまい。併し吾々はそれを人から聽いた事がある。又吾々は之れを一八七〇年から七一年へかけての（普佛）戰爭の光景を書いた著述で讀んだ事がある。そして吾々は、恰も吾々自身の眼で見たやうに、榴散彈が人間の身體を粉碎するのを見たのである。それから吾々の知つてる今一つの事は、四十年前の劣等な大砲や小銃であつたにもかゝはらず、十二萬餘の兵士が名譽の野に於て戰死した事である。近世の戰爭は生きた人間の何割を要求するだらう？　世界の陸軍は昔よりも遙に多くなつてゐる。獨逸だけでも六百萬の兵士を戰場に出す事が出來る。佛蘭西も亦同數を出す事が出來る。それ故に七〇年――七一年の戰爭は、單に長く擴がつた前哨の衝突たるに過ぎないのである！　私はかゝる大多數を心に措かうとすると――お互に衝突せんとして進軍するのを思ふと、私の腦は眩暈くのである。私は呼吸が留るやうに思ふのである。

それならば、吾々は、吾々の父以外の人間から出た種族であらうか？　吾々がたつた一つの生命を持つてるのは、それを失はんがためであらうか？　それがために吾々はこんなに烈しく此の生命にひつ付いてゐるのだらうか？　吾々の故國は、此のやうに生命の打ちあひをするよりも、もつと價値があるのではあるまいか？

恐らく吾々の中には、復活を信ずる人が多くはゐないだらう。吾々の切り裂かれた身體が、再び新しい輝く國に生き返ると信ずる者はあるまい。吾々は又吾等の天にゐます父が、吾々の殺人行爲を喜ぶだらうとは信じない。其のより良き世界では、彼は吾々を、吾等同胞の殺人者として以外には顧みない筈である。併し吾々は吾等の頭を鐵の運命の前に屈するのである。祖國は吾々を召集した。そして吾々忠誠なる子は、遁るゝ道なき命令

に服從したのである。柔順に……。今日から吾々は、吾等の故國に屬するのである。で、大隊長は一分前に、大聲で其の軍律を讀むだのである。

最早や何事も事實の中にあるのである。

曹長は既に名簿を呼んでそれを調査した。吾々は既に四時間といふもの訓示を受けた。今や吾々は、長い縱隊を造つて、營庭を行進してゐるのである。實に此の日から吾々は、吾等の平服を脫いで、新らしい軍服を着るやうに命ぜられたのである。今日から吾々は兵隊になつたのである。

物事は今や吾々と共に急いで動いてゐる。

二　兵隊

翌日の午後、一同は營庭教練に從つた。吾々は兵營の庭に腹這ひになり、狙ひを定めたり、伏射の練習を行つたりした。

私は丁度狙ひを定めてゐた。

前方のバラックの障壁の上に塗つた標的がある。圓い的、頭の形をした的、胴體の的等である。三百ヤード。私は直射の姿勢をとり、引金に手を懸けた。『胸に直角に』これが標的に正鵠に當るのである。

私の受取つた彈丸は何といふ澤山な事だらう？

若しも其の中に正しく當るのがあつたらどうだらう？

敵軍に對して戰地に送らるゝ之等何百萬人の各各が、若しも悉く數百發を發射して、百發每に一つ宛正鵠を得た物があるならば、仕事は終りなのである……それだけの數は……私は算術上の此の立派な高を見て微笑まずにはゐられないのである……斯くすれば解答は全然一人も無くなるといふ事になる。實に立派な締高である。

スニック！

第五の藥莢がまろび落ちた。

私は他の一連の擬製彈を詰め込んだ。

如何にも疾く、滑かに、それをする事が出來た。一秒——二秒、五個の彈丸を彈倉に裝塡する事が出來た。その各々が、必要に應じて、六人を貫通する事が出來る。柵や立木を射透す事が出來る。又土の障壁や、石の檣を擊ちぬく事が出來る。此の美くしい小さな飛道具に對しては、此の小さなとがつた尖圓體に對しては、事實に於て隱れ得る

物は無いのである。

此のモウゼル銃、これはまア何といふ驚くべき機械仕掛なのだらう。一八七〇年——七一年時代のあのガタガタいふ單發銃は、これに比べて何といふ憐れな惡い鐵砲だつたらう。一時にたゞ一つの弱い彈丸を打つだけて、打つた後に、長い、面倒な、裝塡をしなければならなかつたのである。

それでもあの戰爭では、十萬以上の佛蘭西人と獨逸人とが死んだと言はれてゐる。

一體今度の戰爭では、どれだけの死者が數へられるだらう？　若しも五人に一人が戰場に殘され他の五人に一人が傷病者として家に歸つたならば……その收穫はどれ程の額に達するだらう？

今や兩國何れも地は兵隊によつて滿たされ、兵士は悉く連發銃を以て用意してゐる。そして彼等の總ては、お互に人を殺すべき銃身を以て他人を指し、完全に心臓を射貫くべき技術を練習してゐるのである。

彼等の後ろには大砲が搖れてゐる。砲手等は飛びおりて、架尾をぐるりと引き廻した。彼等は既に整列せられ、一千の黑い砲口は、天に向つて氣味惡るく口を開いてゐる。

吾々は或る時立つてゐた——その時吾々は射擊練習の爲に野營してゐたのである。——そして砲兵中隊の實彈射擊を見てゐた。彼等は前車を取りはずして、そして發射の準備をした。士官等は双眼鏡で遠方を眺めてゐた。標的はまだ眼に見えなかつた。吾々は皆な熱心に射擊區域に眼を注いでゐた。そこにはいつか何物かゞあらはれる筈てあつたのである……。來た！　ずつと遠方に。遙か彼方に何物かゞ動いて來た！

命令が下つた。

副官は右の手で動く的を指した。彼は其の射距離を叫んだ。砲手は狙ひを定めた。そして。

『第一號、用意！　擊て！』

砲彈は既に飛び出した。一瞬間、吾々は鐵の使者が飛び行くのを感じた。空氣が唸つてゐる。ブトン——吾々の前方一千ヤードに於て、砲丸は攻擊してくる騎兵の上に破裂した。そして鉛の雨を青い標的の上に撒きちらした。それから第二、第三、第四、第五、第六の大砲を發射した。

次の的は凡そ一哩の前方にあつた。新らしい射

距離は直ちに發見された。再び不思議な飛道具は驅け出して、その計算した道を被ふて了つた。それが空中にて如何にそれ自身の意思を抑へ、又爆發を抑へるかといふ事は、實に不思議であつた。之等鐵の圓筒は、恰も一つ一つ頭を持つてると見え——丁度生命と意識とを與へられてゐるやうに——確實にその標的を發見した。

砲兵隊が射撃を止めて、前車を着けて、危險な砲丸が箱の中に收められた時に、吾々は射撃せられた場所へ行つて見た。そこには連鐶の的が散らばつてゐた。之等の物は榴散彈によつて——全線に打ち倒されてゐた。頭、胴、手足——吾々は散散に射貫かれない一つの形をも見つける事が出來なかつた。吾々は突つ立つたまゝ、其の正確な事に驚いた。そして其の標的につき、之れが木片と帆木綿といふよりも、もつと別な考へを以てひそかに戰慄した。

如何にして彼等は遠方に對し、かゝる完全な、精確な機關を得たのだらう？

專門家等は、明けても暮れても發明に志し、機械上の新らしい奇蹟を造つてゐる。戰爭の機械的方面は、天才と美術の高い地位に引き上げられた一分間に二百四十發以上！　機關砲の機械作用は何といふ奇蹟であらう。誰でもそれを用ふる時は、それは雨の降るよりも早く彈丸を噴き出すのである。そして此の自動機は、餓えたやうに唇を舐めずり、右から左へ彈丸を掃き出すのである。それは身體の中頃で狙つて、一掃きに全射線に彈丸を飛ばすのである。恰も死が古い鐵に向つて其の大鎌を打ち合せるやうに、今日ではそれは老練なる機械師として卒業したのである。彼等は最早手で獲物を刈る事を已めた。今日では滑車輪さへも、機械作用によつて成就せしめられた。それ故に、彼等は吾々百萬人の身體を、埋葬機によつて地の中に抄い込むだらう。

殃ひなるかな！　私は此の恐ろしい考へを除く事が出來ない。夫は常に再び芽を出すのである。吾々は小賣から卸し賣に進んで行つたのである。今迄自分自身の手で働いてゐた織臺に、今度は大きな機械織を据ゑ付けたのである。一度は騎士の死、名譽ある軍人の死であつたのが、今やそれは機械による死となつたのである。

即ちそれが私の食道を刺すのである。吾々は發明家――即ち機械師によつて、まつしぐらに生から死に向つて突き進むのである。恰も彼等が大仕掛な生産方法によつてボタンやピンを造り出すやうに、今や彼等は機械によつて死者や不具者を造り出すのである。全く突然であるが、なぜ私は身震ひを初めたのだらう？　私は突然、日中のやうに明かに、狂人になつたのではあるまいかと思つた――血まみれの狂人が吾々に下りて來たのではあるまいかと思つた。

殃ひなるかな！　私は最早それを思ひ煩つてはならない。でなければ、それは私を氣狂ひに驅るだらう。お前の鐵砲は用意してあるのだ！　敵はお前に向つてくるのだ！　人と人との場合は已んだのではないか？　若しも彈丸が一層正確に其の宿を見付け出したらどうなるのだ？　正確に狙へ――胸に眞直に……。本統に誰が吾々に向つてくるのだらう？　その男を私は今撃ち殺さうとしてゐるのだ！　敵？　何が敵なのだ？

私は曾て私の休暇の日に於ける輝く朝を思ひ出す。それは佛蘭西の一ステーションに於てゞあつた。私は不思議にも、再び窓の外を眺めるのである。それは外國で外國人であつた。別れる時が來た。驛長が其の時信號を與へた。すると小さな老婆が汽車の窓の方へ顫へる手を伸ばした。吾々の車に乘つてゐる立派な青年が、其の手を取つて握りしめた。老婆の眼からは母としての涙が流れ落ちた。

彼女は一言も喋らなかつた。彼女はたゞ息子を眺め息子も亦その母を見おろのすみであつた。其の時私の心の上を或る默示の様なものが閃き通つた。外國人でも涙を流すのである。夫は吾々に於けると全く同じである。彼等はお互に別れる時に泣く。彼等はお互に愛して、そして悲しみを感ずるのである……。列車がステーションを軋り出した時に、私は窓の外を見守つてゐた。そして老婆がしよんぼりとプラットフォームに立つて、少しも動かずに列車の後を見送つてゐるのを見た。私は私の母の事を思はざるを得なかつた。そこで左樣ならを言つたのは私自身で、彼方のプラットフォームに泣いてゐるのは私の哀れな老母ではあるまいか。ハンカチーフは微風に靡いてゐた。彼等は

彼等の手を振つた。私も亦私い手を振つた。何となれば、私も亦彼女に屬する一人であつた…。

私は再び私の銃を肩に載せた。そして標的の眞中に狙ひを付けた。

私は最早かゝる考へて自分自身を苦しめないだらう。

標的はだん〳〵私の方へ近づいてくるやうに思はれる。

突然、其の青く塗つた形が、恰も其のあり場所から私の方へ歩き出したやうに見えた。私はびつくりしてそれを眺めた。私は明かに私の前に一人の顔を見た。私は指を引き金にかけたが、ある壓迫の感じを覺えた。なぜ私はそれを引かないのだらう？　私の指は顫えてゐる…。今だ、今だ、私はその顔を認めた。それはナンシーて其の母に左樣ならを言つた青年である……。

引金は引かれた。そして非常な恐れが私を支配した。私は生きてる人の顔に向つて眞直に發砲したのだ。人殺し！　人殺し！　お前はあの母親のたゞ一人の子を撃ち殺したのだ。お前はお前の兄弟を殺した人殺しだ…。

私は私自身を正氣に返らせた。私は私自身を整理した。人殺し？

莫迦な！　幽靈だ！

お前は軍人である。

軍人は人間では無くなつたのだ。祖國は今火刑にあはうとしてゐる。

かくして髮の毛一筋間違はずに私は敵に狙ひを定めた。若しもこちらで誤まれば、敵がこちらを撃ち仆すだらう。

『撃ち貫け！　その胸の眞中を』

三　天に居ます吾等の父

吾々は金曜日に軍旗の下に集つた。月曜日には出發すべき筈である。今日は日曜であるから、正裝して敎會へ禮拜に行くのである。

私は昨夜よく眠る事が出來なかつた。それが爲に今日は物憂くて不快である。

やがて吾々は、敎會の中にひし〳〵と並んて坐つた。

オルガンがゆるやかに鳴り出した。

私は背中を後ろに凭たせかけて、會堂内の薄暗

い微光の中に漂ふ響きに耳を傾けた。子供の頃の記憶が再び眼の前にあらはれた。私は會堂の隅に蹲つて神聖な説教に聽き入つてゐる小さな眞面目な顔の少年を見つめてゐる。牧師は祭壇の前に立つて、恭しく神の訓へを説いてゐた。廊下の唱歌隊は應への歌を歌つてゐた。オルガンは音高く鳴り出して、壯嚴に建物の中に滿ち渡つた。私は甘い怕れの歡喜に打ち浸つてゐた。何となれば主なる神が吾等の上に下りて來られたからである。神は私の前に立つて、私の身體に觸れた。それ故私は顫へおのゝく歡喜の怕れのために眼を閉ぢた：：：：。

それは長い、長い、昔の事である。そして過ぎ去つて了つた若さそれ自身のやうに、總て過ぎ去つた事である：：：。

不思議だ！私はこの歳月を疑ひと不信仰とに過ごして來たのに、此の明かに意識さるゝ瞬間に、長い以前に消えてしまつた敬虔な雰圍氣が私を捕えて了つた。そして私には拒む事の出來ないほど烈しく私を動かした。それは同じ重くるしい微光である——同じ憧れ渡る天使の聲である——同じ恍惚とした怕れの感じである——。

私は自分自身に氣を付けて、眞直に堅い木造の坐席に腰を懸けてゐた。

階下の眞中の通路にも、側の通路にも、又二階の行廊にも、制服を着た兵隊ならぬ者は無かつた。そして悉く祭壇の方へ、長い嚴めしい黑のガウンを着た蒼白い人の方へ、顔を向けてゐた。牧師は物優しい、朗かな聲の人で、その脣からは神の御名が流れて出た。

見よ！彼はその手を擴げた。吾々は吾々の頭を下げた。彼は墓場から響くやうな聲で吾々に祝福を告げた。彼は神の名によつて吾々に惠みを與へた。彼は吾々を見捨てるなと言つて吾々の連發銃を祝福した。彼は特許無反動車上の鋼線砲を祝福した。彼は貴重な彈藥を悉く祝福して、一發と雖も空しく費されず、一個と雖も無爲にして空中を過ぎ行かしむる勿れと言つた。實に其の一彈は百人の人間に當り、百人の人間を一度に粉碎する事が出來るのである。

天にゐます父よ！御身は斯くの如き恐ろしい沈默を以て吾等を見おろしてゐられるのである。

御身はかゝる人間の子を見て戰慄なさるのか？　爾、哀れにも弱き神よ！　爾は僅にソドムとゴモラの上に價値なき瀝青と硫黄とを降らせたるに過ぎぬ。然るに爾の子たる吾等、爾の造りたる吾等は、精巧なる機械によつて互に相手を驅逐せんとし、全市を工場内にて撲殺せんとしてゐるのである。玆に吾々は立ち、吾等の手を爾の子に擴げて祈り、且つホザナ！と叫びながら、一方に吾々は、爾と同じ者の顏に目くるめく砲彈や榴散彈を浴せかけ、そして十字架より來た人の子を、小銃の的でゞもあるやうに射殺さうとしてゐるのである。

やがて聖餐式が初まつた。オルガンは遙か彼方から神秘的に鳴つて來た。そして救世主の肉と血とは吾々の肉と血と一緒になつた。

救世主は高い處の十字架に懸かつてゐて、そこから吾々を見おろしてゐる。

何といふ蒼い頰だらう！　その眼は全く死んだ人の眼だ！　吾々を援けるのは此の基督なのだらうか？　吾々の飮んだのは此の人の血だらうか？　吾々が昔學校で敎へられたのはこの事だつたらうか？　御身は人間を愛さないのか？　そして御身は全人類のために死んだのでは無いのか？　御身の腕を私の方へ伸ばせ。私は何かしら御身に訊かねばならぬ事がある。……噫！　彼等は御身の腕を十字架に釘づけにしたのだつた。それ故に御身はそれを私の方へ伸ばす事は出來ないのだ。

私は顫へながら眼を死骸のやうな顏に注いだ。そして彼が長い以前に死んだといふ事を考へた。そこにあるのは木の端に過ぎないのである。偶像に過ぎないのである。基督、吾々が祈るのは最早御身では無いのである。見よ！　見よ！　それは彼である基督敎國の新らしい護國の神！　見よ！　それは大成吉斯汗である。彼に就ては、吾々は、彼が世界の歷史を火と劍とで掃き去つて、骸骨のピラミッドを築き上げたといふ事を知つてゐる。さうだそれが彼である。吾々をして人間の頭の山を築かしめよ。吾々をして人間の臟腑の家を積ましめよ。大成吉斯汗！　爾、各等の愛護者よ！　吾々を祝福せよ！　亞細亞の空に鎭坐する血に濡れた汝の父に祈れ。さうすれば彼は吾等と共に雲を通して來り、彼の呪はれたる國民を打ち倒し、血まみれになる迄踏み蹴り、決して再び起つ能は

ざらしむるに至るだらう。紅い霧が私の眼の前を泳いでゐる。突然、私は私の前に血より外には見えなくなつた。大空が開いた。そして眞紅な洪水が窓から流れ込んで來た。血は祭壇からも噴き出した。壁は天井から床まで血で染まつた。そして——神、吾等の父は血の中から歩み出した。彼は眞直に立つてゐたが、その髯と髪は血の中に浸つてゐた。血まみれの巨人が私の前に立つてゐる。彼は祭壇の後ろに坐り、そして厚い、粗い唇で笑つてゐる——そこにダホミーの王、その奴隷の屠殺者が坐つてゐる。黑い首斬役は其の刄を掲げて私の頭の上に廻してゐる。やがて、すぐ私の首は床の上にころがり落ちるだらう——そして眞紅な噴水が私の頸から噴き出すだらう……人殺し、人殺し！　人殺してなくて何だらう！　援けてくれ！

その時——

會堂の戸がきしめき開いた——

光と、空氣と、青い空とが流れ込んだ。

私はほつと安心の息をついた。吾々は立ち上つて、長い列をつくつて、室外の黄昏の中へ歩み出した。

私の膝はなほ下の方で震へてゐる。

吾々は列を正して、圓鋲の兵隊靴を踏鳴らして、町中を兵營の方へ歩み出した。私は、私の仲間が正氣で平然として私の側を歩いてゐるのを見て、恥かしいと思つた。そして私自身哀れな卑怯者と叫んだ。何といふ神經の弱い。ヒステリー仕込みの人間なのだ！　血を見れば直ぐ潰えて了ふなんて！　お前の祖先は丈夫な百姓で、戰爭に行く時は喜んで叫んだものであるが、何といふ哀れな、神經衰弱の子孫なのだ！

私は氣を取りなほして、頭を眞直にした。私は決して卑怯者では無かつた。私は常に男子としての私と眼と眼を見合はせてゐた。私はこれからまた、どんな事が起らうと、さうする事にしよう。

（未完）

新刊

表象派の文學運動

（岩野泡鳴譯）

"The Symbolist Movement in Literature." By Arthur Symons. の翻譯である。表象的表現が、藝術上最高表現であるか否かは別問題として、表象派其物を知るには英文中此の原著の右に出づるものがない。イブセン、メーテルリンクの表象的作品に關する研究書は、それぞれ出て居るが、表象派全體を見るにに、原著を推す。併し此の譯者が原著の價値を十分に傳へて居るとなると、それは自ら一個別の問題をなす。此の場合にあつては、譯者が間違なく英語を讀めるかと云ふ問題が、眞先きに來る。譯者は序文中に、自分の翻譯の苦心と經驗とを吹聽し、佛語は不十分であるが、其れが爲めに、英語の智識まで疑はれるやうなことがあつては、甚だ不本意であると斷つて居る。併し、それに關らず、吾々は、譯者の英語の智識を怪しみ、苦心と經驗な疑はざるを得ぬ。文章晦澁を極めて居る。譯者が例言で斷つた如く、本書其物の性質は六つかしい。併し、譯文の難解晦澁は、單にそれだけから來てゐるのではない樣だ。譯者は『原文の語法と發想とを其まゝ再現した』ことを難解の理由として居るが、其まゝ再現するならば、翻譯する必要は全然ない。根本から語法發想の違ふ國語を其まゝ再現すると云ふことは、不可能だ。況して其語法が十分解つて居らない證據があるをや。兎に角、譯書を解するには、讀者が英語の語法を知つて居らなければならぬ。譯者は、譯文の方へ先づけちを付けられるのは甚だ不本意であるから『本書を直ぐ理解するだけの相當の素養が出來るまで讀まないでゐる方がよからう』と云つて居るがまア是れに從ふ方が安全だ。少なくとも、原書が十分讀め、譯書と對照して誤解を發見し、且つ日本文で理解し難い所は、英文で理解することが出來る樣になるまでは、讀まない方がよからう。譯者は、翻譯の如きは、『文藝家のやる事としては第四流、第五流の仕事である』と云つて居るが、是れには至極同感である。本書の如きは、譯者が第一流であるばかりに、原著者も、讀者も恐らくは出版者も、最後に譯者自身もそれぞれ大きな損害を受けて居る。併し、凡そ天地間のもの、一として存在の理由を有せざるはない如く、本書も亦、儼として存在の理由を有して居る。夫は、外國語が十分讀めなくても、文藝家として第一流になれると云ふことを雄辯に證明して、多くの誤解家に安心と慰藉と、或は激勵とを與ふる點にある。（貞）（定價金壹圓牛込矢來町新潮社）

人と超人

（堺　利彥譯）

曾て本誌に記載したショウの『人と超人』の二幕目以後に、第三幕の梗概、並に第四幕の全譯を添へて完成したものである。本書に就ては今更らしく云ふの必要が無い程讀者には知られて居る筈である。只だ本書と同時に出版された細田某の『人と超人』の第三幕夢の場を全譯して居るに比し、本書が單に之を梗概に止めて居るのは甚だ物足らぬ心地がされる。然し乍ら又、本文以外に、『原著者の序文』『ショウの人物と著述』『革命家必携』『革命家座右銘』『私が倫敦で見た人と超人』とを附錄としたのと、譯文の推敲洗練とは本書の特色であらう。要之、本書は單に『人と超人』を飜譯せるに止まらず、ショウの思想を研究し紹介せんとする態度を以て、他書に優れるも　である。（金九十　錢小石川區原町六丙午出版社）

佇みて

（土岐哀果著）

今夏、著者が滿州朝鮮を旅行して得た印象の歌集である。ばかに氣の利いた、贅澤な裝釘だ。氣に入つた歌二三首を擧ぐ。

朝鮮にも囚人が居て草の花に、何か擔ぎて連れられてゆけり。

よく見ればこの寂しさによぼの水田に、馬の糞のよな土くれに稻の芽が青み。

背骨が痛ししばし降り立てば白日の、霧のかなたに喇嘛塔の見ゆ。

すんがりのあれが鐵橋高梁の、五月芽は青くさびしく遠く。

ほほじろは青麥に啼き老虎尾山の、いただきに小さくとりでが見ゆれ。

全體に『黄昏に』や、『不平なく』に見られたやうな、いゝと思ふ歌が尠い。(金六十錢日本橋區檜物町九東京堂)

■エルジエ●リントネル　(佐藤綠葉譯)

本書の著者カリン、ミヒヤエリス女史は小說『危險なる年齡』を著はして名聲甫めて大に上れる丁抹の女流作家である。彼の瑞典のエレン、ケイ女史が、評論によつて人生を批判せんとするに對し、カリンは小說によつて婦人の內部生活と、その秘密とを描寫して居る。本書は更年期に達して初めて感じた懊惱の爲に、遂に數十年同棲の夫と離婚した女の、悲哀、苦惱、寂寥、煩悶など描ける者で、歐米に於ては、本書は一種の新らしい婦人問題の提供者として、非常な歡迎を受けて居るそうだ。女の有せる特別な世界、其世界に於ても、殊に重大な時期に達した女の心理を、大膽に巧妙に描いて居る本書は、男にも女にも讀まれればならぬ物であらう。(金八拾錢神田松下町一〇以文館)

■默從　(小栗風葉著)

小栗風葉氏の近業『默從』以下、『無僞』、『半途』、『老後』の諸篇を收めてゐる。是等の中、『默從』の一篇は、てふど氏の嘗に作つた耽溺の裏を行つたとも見らるべき作で放埒な夫に對する妻の感情、思想、態度の描寫に、此の作の價値があるのであらう。兎に角、此の集の中で、一番面白くもあり且つ氏の近業中、最も意味のあるものは、やはり此の一篇であるだらう。(金一圓廿錢京橋區南鍋町一の二隆文館)

■處女　(田中介二譯)

海外文藝叢書第七篇として、ダンヌンチオの作『處女』、『祭壇へ』、『センチメンタルな物語』の三篇を收む。此の諸篇は、何れもダ氏が初期の作に屬し、小說よりも寧ろ物語に近い性質のものである。隨つて後期の作に見るやうな、艷麗巧緻な技巧を窺ふ事は出來ないが、然もその特色とする感覺描寫は、處女を主材として人間の運命を描ける各篇を通じて豐かに現はれて居る。但し、諸篇中に挿入されて居る伊太利語を、原語の儘で載せて居るのは、決して親切といふ事は出來ぬと思ふ。(金四拾五錢神田區神保町興文館)

■煤煙　(森田草平著)

小說『煤煙』の終篇たる第四卷が出た。要吉の子の病氣になる處から、要吉と朋子とが野州の温泉場へ駈け落ちをして、死なうとする處までが收められてある。實際を云ふと、此の小說の事實に就ては何も知らない私は、どういふ譯で此の作が斯く有名になつたか解する事が出來ない。朋子の心理も不明なら、兩人が或は死なうと云ひ、或は生きやうと思つた原因も動機も、一向譯の解らないものである。只だ、要吉が朋子を憎んだり、反抗したりしながら、魔女の妖術にかゝたつたやうに囚はれて居る心理の描寫は、流石に面白いと思ふ。然しそれ迄も、實際に考へれば隨分馬鹿な男である。(金八拾五錢牛込區矢來町新潮社)

大久保より

榮

■病中のお見舞に對し厚くお禮申上る。

■自分ではもう全快したつもりなのだが、醫者の嚴命によつて、まだ床に就てゐる。ふだんの氣分と殆んど變りもないのだが、たゞ永い間おしやべりをしたり讀み書きをすると、すぐに熱が出るので少々弱つてゐる。こんどの原稿などは、漸く五六日もかかつてポツリポツリと書き上げたので、何れも氣乘りのしない事おびたゞしい。

■毎月々々、こんどからはウンといゝ雜誌をつくりたいと思つてゐるのだが、さて、なか〳〵思ふやうなものは出來ない。此の小さな雜誌を、最初から僕等の希望したやうに、他の雜誌には到底見る事の出來ない特異な雜誌として、そして眞面目なる何人も必ず見遁す事の出來ない權威ある雜誌として生長さすには、まだ〳〵僕等の努力が足りない。もつともつと僕等の角を、ありのまゝに角立たして見せなければ駄目だ。同人の各々の角が、遠慮なく發揮せられてそれが一つの大きな角になつて、誌面の上に現はれれば駄目だ。要するに僕等はもつと勉强しなくちやいかん。

■澳門の師復といふ人から、エスペラント文の手紙が來た。以前廣州で支那文及びエス文の無政府主義雜誌『平民之聲』を出して居たが、袁政府に逐はれて澳門に走り、此處でも亦葡萄牙政府から雜誌の發行を禁ぜられた。しかし何とかして近日中に又出すと云つてゐる。雜誌と一緒に小冊子も送つて來たが、其の『軍人之寶筏』の如き、Alfred Russell Wallace の排斥軍國主義、Gustave Hervé の反對祖國主義、Portalle の徵兵之悲境、及び軍人與服從、社會革命者軍人唯一之事業也とを收め、實に痛快琳瑯たるものがある。猶此の雜誌には何れ僕も寄稿する筈だ。

■十四日の讀賣新聞に『十一月の感想』と題した、土岐哀果の短文がある。其の一節に言ふ『三十歲まで革命家にならないものは劣弱者であるといふやうな事をバアナアド、ショウは言つてゐる。僕の二十代はもう三週間しかない』と、あの男、どんなつもりで、こんな事を書いたのやら。

■深澤岩十譯エデキント作『犧牲の處女』が、一月中に中興館から出る。

■芝の某氏から金十圓の寄附を受けた。正月號の印刷費が半分ばかり不足するので大ぶ困つてゐたが、お蔭で大に助かつた。

——十二月廿二日——

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。
■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正二年十二月三十日印刷納本
大正三年一月一日發行

編輯兼發行人　府下大久保百人町三五二　近代思想社內　大杉榮
印刷人　府下大久保百人町三五二　荒畑勝三
印刷所　京橋區銀座四丁目一番地　秀文館印刷所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

權威ある純女流文藝雜誌

第四卷第一號

青鞜

每月一日發行

新年號

ソニア、コヴァレフスキーの自傳　野上彌生譯

小說題未定（小說）　水野仙子

父（小說）　荒木郁子

凪ぐ日（小說）　加藤みどり

脫れられぬ人（小說）　川田よし

戀愛及生活難に對して　西崎花世

附錄　ウォーレン夫人職業合評　らいてう　野枝　KI　千歲　花世　清　其他

夢（歌）　三ケ島葭子

別後（歌）　齋賀琴

靈に（歌）　岩淵百合

イワノフ（戲曲）　瀨沼夏葉譯

小說題未定　尾島菊

旅へ行く日（戲曲）　小林哥津

野枝さんの『動搖』に現はれた女性的特徵　小倉清三郎

發行所　青鞜社　東京府下巢鴨町　振替東二一一一六

特價金四拾錢　郵稅金壹錢五厘

發賣所　尚文社　東京市神田區南神保町十六

生活と藝術

一部定價十八錢
郵稅一冊一錢
三ヶ月五十四錢

新年號要目

- 評論……伊庭孝
- 評論……荒畑寒村
- 紹介……仲田勝之助
- 詩……土岐哀果
- 感想……佐藤緑葉
- 評論……島村民藏
- 小說……原田讓二
- 感想……上司小劍
- 隨筆……西村陽吉
- 翻譯……昇曙夢
- 評論……稻毛詛風
- 評論……堺利彦
- 評論……楠山正雄
- 新らしき歌……青年諸氏
- MEMO……哀果生

圖書目錄贈呈

▲大正三年一月改版▼

東雲堂は現代文藝諸家の著述に係る清新なる文藝書を發行する事に努力致してをります。この目錄には左の諸先生の著書を掲載してございます。

北原白秋氏　若山牧水氏　三木露風氏
石川啄木氏　土岐哀果氏　前田夕暮氏
吉井勇氏　齋藤茂吉氏　國木田獨歩氏
木下杢太郎氏　川路柳虹氏　河井醉茗氏
石井柏亭氏　小山内薰氏　平塚明子氏
野口米次郎氏　其他諸氏

■東京市日本橋區檜物町九番地■電話本局一八七一番■振替東京五六一四番■

東雲堂書店

特價卅五錢

假面

第三卷 新年號 第一號

郵稅金二錢

挿畫・レオン・バクスト畫露西亞舞踊 六葉

第二巻 第一號
一月一日發行

エゴ ゴオホ號

新年號

發行所 東京小石川區西江戶川町九 日本洋畫協會
編輯所 東京牛込區新小川町三ノ二一千家方 エゴ社

ゴオホ畫集

自畫像	サイプラス	野路	夜の酒場	ラザロの復活	病院の庭

□以上六枚を以て一組とす
□畫面は各九寸に七寸
□ゴオホ小傳を附す
□畫は白厚紙臺紙附
□製版印刷共に鮮明
□定價七十錢、本月中特價
▽市内各書店にて販賣す。

特價一組五十錢

現代の洋畫 新年號

毎月二回發行 一日と十五日

第二十二號の內容

(正價二十錢・送料共)

挿畫

婦人の肖像……アマン・ジャン
港の夕……田邊至
『草刈』の習作……矢崎千代治
癲狂院の庭……ゴオホ
群像……オスカー・ラスク
太き王の女……梅原良三郎
肖像……アマン・ジャン

記事

實在に關して……齋藤與里
藝術の新傾向……松本文雄
象徵論(下)……渡邊吉治
立體派(三)……松本文雄譯
私の畫論……大野隆德
ロダン彫刻……木村莊八
奈良より……岡本歸一
其他

發行所 東京小石川區西江戸川町九 振替口座東京四三七三番 日本洋書協會

近代思想 第二巻第四號

大正元年九月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正三年十二月三十日印刷納本 大正四年一月一日發行

一月號

金十錢



近代思想

第二巻第四號

大正元年十二月三十日印刷納本 大正二年一月一日發行

一月號

金十錢

近代思想
第二巻第四號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正元年十二月三十日印刷納本大正二年一月一日發行
一月號
金十錢

